遊戯王デュエルモンスターズSINGLE FAITH

ＲＡＩＮ@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王デュエルモンスターズＳＩＮＧＬＥ　ＦＡＩＴＨ

【Ｎコード】
Ｎ３６７０Ｈ

【作者名】
ＲＡＩＮ@

【あらすじ】
前作、『ＴＡＧＡＣＡＤＥＭＹ』の設定を引き継ぎ新世代に突入！主人公がアカデミアでなす事とは？

フェイズ１：僕と私の入学式（前書き）

初めましてこんにちわ
お久しぶりですこんばんは

ＴＡＧ　ＡＣＡＤＥＭＹの続編です
今回はタッグしません（反省しました）

では、改めて設定確認を

・遊戯王との繋がり（主人公が遊戯の話）
アニメ版寄り
ペガサス生きてます
なので、夜月光はの邪神騒ぎはありません
が、邪神のカードは存在します

・ＧＸとの繋がり（主人公が十代）
アニメ版
サンダーは光と闇の龍を使いませんし、「おいおい、ミーの勝ちじゃないか」さんはいません
逆にアニメ設定であるサンダープロ化や丸藤兄弟プレゼンツのプロリーグは存在します

・５Ｄ’ｓとの繋がり（主人公が遊星）
無関係です
５Ｄ’ｓと同一カードが出てきても、同じ設定ではありません
シグナーいませんし、サテライトもありません

既に前作主人公がジャンク使ってますしね

だいたいこんな感じです

フェイズ１：僕と私の入学式

まだ春と呼ぶには早く、冬に近い。そんな季節
未来のデュエリストを育成する機関、デュエルアカデミアにはたくさんの学生が集まっていた

ここはデュエルアカデミア分校
ＧＸの舞台とは異なる、周囲を木々に囲まれた緑溢れる陸の孤島

「はいはーい受験番号５０番までの受験者はこっちについてきてくださーい！」

引率の学生の後を追い、分かれていく受験生たち
その中に彼がいた

「はぁー、やっぱ受験で来ると違うなー！！」

大納剛（だいなごう）
今年度のアカデミア高等部受験生である

「それでは行きますよー！」

黄色い旗をひらひらと振る、黄色い制服の在校生の後について、ア

カデミア校内へと入っていく

――……

……――

「受験番号、３１番大納君は３番リングに来てください」

スタンディングデュエルが楽に行える広さのスペースが４つ
ここはデュエルリング、ただいまから実技試験なのだ

「よっしゃー！！」

掛け声と共に、待合室代わりの観客席を駆け下り

「き、君！階段はそこじゃ

手すりを超え、飛び降りる

「ダイナです！！よろしくお願いします！！」

大きな着地音と共に静まり返るリング内
静寂を破ったのは、ダイナの対戦相手であろうなにやら適当な英語がプリントされた私服の生徒

「おーおー！元気いっぱいでよろしい！」
「し、しかし冴神（さえがみ）さん……」
「いいじゃねぇか、別に誰か怪我したわけじゃあるまいし」

戸惑う青色の制服の生徒にあっけらかんと言い放つ

「（私服って事は研究生……だっけか）」

研究生とは、高等部三年間を終え、優秀だった生徒がアカデミアに残り更に学習できる制度である
三色の寮――オシリス・レッド，ラー・イエロー，オベリスク・ブルーのどれにも属さない、第四の立場である

「俺は冴神流転（るてん）、見てのとおりの研究生だ」
「大納剛です！！」
「まぁ積もる話もあるんだが、後が閊えててな。さっそくだがやるぞ！」
「はい！！」

流転の立つデュエルリングに上がるダイナ

「（頼むぜ、俺のデッキ……！！）」

コホン、と技とらしく咳払い１つ

「では実技試験を始める。勝敗は関係なく、途中の判断なんかが試される」
「でも、勝つに越したことはないんですよね？」

ダイナの一言に流転の表情が変わる

「その心意気は非常によろしい、剛ちゃん」
「いや、ダイナって呼んでくださいよ……」
「ダイナちゃん」
「あ、結局『ちゃん』つけるんだ」
「その言葉、忘れるなよ？」

流転が自身の腕につけたデュエルディスクを構える
ダイナもそれに応える

「行くぞ！」
「はい！！」
「「デュエル！」」
今、ダイナの試験が始まった
「俺のターン、ドロー！！」
先攻は大納
「『仮面竜』、召喚！！カードをセットしてターンエンド！！」
△
■
４０００／４
「ドラゴンデッキかー。ドロー！『Ｅ・ＨＥＲＯバブルマン』を召喚！」
「『ＨＥＲＯ』デッキ！？」
ダイナのドラゴンに対峙するのは、全身青の中太りな『ＨＥＲＯ』

と呼ぶにはいささかふさわしくないモンスター

「そして『バブル・シャッフル』発動！モンスター1体ずつを守備表示に変更！そのあと『バブルマン』をリリースして手札から新たな『ＨＥＲＯ』を呼び寄せる！」

大量の泡にもまれ、防御体性になる『仮面竜』
一方、流転の『バブルマン』はその中を昇っていく

「来い、『Ｅ・ＨＥＲＯエッジマン』！」

代わりに現れたのは、全身が金属のようなモンスター

「上級ＨＥＲＯ……でも、『仮面竜』は『バブル・シャッフル』の効果で守備表示！！、ダメージは０！！」
「『エッジマン』で『仮面竜』を攻撃！」

背中から翼をだし、勢いよく『仮面竜』を切り裂く

大納ＬＰ４０００→ＬＰ２５００

「あ、あれ？」
「『エッジマン』は貫通効果持ち！表示形式は関係ないぜ？」
「くっ……でも！！『仮面竜』の効果で『ダブルドラゴン』を特殊召喚！！」

モンスター破壊の演出（エフェクト）の後には、幼い双子の竜が残っていた

「カードを1枚セットしてターンエンドだ」

△
■
4000／2

「ドロー！！」

引いたカードを確認、左手に持ち替える事をしない

「『ダブルドラゴン』は1体でドラゴン族最上級モンスターのリリースになる！！『ダブルドラゴン』をリリース、『ブラックブラッド・ドラゴン』を召喚！！」

新たに召喚されたのは、漆黒のドラゴン
硬質化した黒い皮膚は、まるで鎧のようになっている

「『ダブルドラゴン』の効果で１枚ドロー！！」
「『エッジマン』と互角のドラゴンか！」
「更に！！『ドラゴンズサーヴァント』を特殊召喚！！」

ダイナの場に、龍人（ドラゴニュート）の騎士が現れる

「『ブラックブラッド』の効果！！自分のドラゴン族モンスターをリリースすることで、エンドフェイズまでその攻撃力を得る！！『ドラゴンズサーヴァント』をリリース！！」

龍人が赤い光となって、『ブラックブラッド・ドラゴン』を包み込む

ブラックブラッド・ドラゴン
ＡＴＫ２６００→ＡＴＫ４０００

「『ブラックブラッド』で『エッジマン』を攻撃！！」

豪快な一薙ぎに弾き飛ばされる『エッジマン』

流転ＬＰ４０００→ＬＰ２６００

「んー、なかなかやるな」
「モチロン！！」
「でも、まだまだだな！リバース発動、『ヒーロー・シグナル』！」

２人の辺りの天井が薄暗くなり、『Ｈ』のスポットライトが光る

「デッキから☆４以下の『ＨＥＲＯ』を呼び寄せる！俺が呼ぶのは……『オーシャン』！」

波と共に現れたのは、スマートな半魚人、

「ターンエンド！！」

△
■
２５００／４

「ドロー！」
「（モンスターが途切れない……やっぱすげぇや）」

お互いに決して穏やかな攻防は行ってはいない
しかし、流転は反撃に対する策を残した上で攻めてきているのだ

「『オーシャン』の効果！墓地の『エッジマン』を回収！」
「モンスター並べさせないようにしないと……」

いくらダイナのデッキが上級モンスターを展開することに特化しているとはいえ、やはり出されていいものではない

「『ヒーロー・マスク』発動！デッキから『ネクロダークマン』を墓地へ送ることで、エンドフェズまで『オーシャン』は『ネクロダークマン』として扱う！」
「……あ、『融合』か！？」

『E・HERO』モンスターの強み、それは魔法，罠によるサポートと豊富な融合パターンにある

「残念不正解！墓地の『ネクロダークマン』の効果で『エッジマン』をリリースなしで召喚！『ブラックブラッド』には『エッジマン』と共に退場してもらおうか！」
「やばっ！？」
「『エッジマン』で『ブラックブラッド』を、『オーシャン』でダイナちゃんを攻撃！」

ダイナを守るように立ちふさがる『ブラックブラッド・ドラゴン』
しかし、『エッジマン』を防いだところで力尽き、『オーシャン』
の攻撃を許してしまう

大納ＬＰ２５００→ＬＰ１０００

「やば、ライフポイントが！！」
「カードをセットしてターンエンドだ」

△
■
２６００／１

「ど、ドロー！！」

恐る恐るカードをドローするダイナ
引いたカードを目にした瞬間、その表情は嬉々としたものに変わる

「リバース発動、『不死の竜』！！墓地から『仮面竜』を特殊召喚
！！更に『ドラゴンズサーヴァント』を特殊召喚！！」
「２体のリリース……よし、来い！」

特殊召喚のみで2体のモンスターをそろえたダイナ
と、なれば残るは当然

「2体のドラゴンをリリース、混沌割く光よ、『光と闇の竜』！！」
「おっ！」

体を白と黒で二分されたドラゴン
その存在感に少し圧倒される

「『光と闇の竜』で『オーシャン』を攻撃！！」

放たれる光の波動は『オーシャン』を滅殺する

流転ＬＰ２６００→ＬＰ１３００

「くっ！」
「ターンエンド！！」

△
｜
１０００／３

「ドロー、効果無効か……」

『光と闇の竜』には、自身のステータスを代償とする代わりにあらゆる効果を無効化する効果がある
これは、サポートカードをメインとする『E・HERO』には辛いモンスターだ

「『レディ・オブ・ファイア』を召喚、カードをセットしてターンエンド！」

△
■■
1300／0

「エンドフェイズに『レディ・オブ・ファイア』のバーン効果が発動……するけど」
「『光と闇の竜』の効果で無効！！」

光と闇の竜
ATK2800→ATK2300
DEF2300→DEF1800

「ドロー！！『光と闇の竜』で『レディ・オブ・ファイア』に攻撃

！！」
「『ヒーロー・バリア』！」
「無効！！」

『レディ・オブ・ファイア』を守るように立ちはだかったバリアは、闇の波動に飲まれて消えてしまった

光と闇の竜
ＡＴＫ２３００→ＡＴＫ１８００
ＤＥＦ１８００→ＤＥＦ１３００

「あせんなって！更にチェーンしてリバース発動、『孤高のブレイブ・ヒーロー』！」
「な！！『ヒーロー・バリア』は囮だったのか！！」

『光と闇の竜』の効果は特殊で、１つのチェーンに１度しか効果を発動できない
つまり、『孤高のブレイブ・ヒーロー』は有効

「その効果は対象のモンスターの表示形式で決定する！攻撃表示は、墓地の『ＨＥＲＯ』の数だけパワーアップ！」

Ｅ・ＨＥＲＯレディ・オブ・ファイア
ＡＴＫ１３００→ＡＴＫ２５００

「返り討ちだ！」

光の波動すら焼き尽くす炎に身を焦がす『光と闇の竜』

大納ＬＰ１０００→ＬＰ３００

「ぐっ……今度はこっちの番だ！！『光と闇の竜』が破壊されたことにより、『ブラックブラッド』復活！！」

炎の中から、再び現れる漆黒の竜

「『レディ・オブ・ファイア』に攻撃！！」

強化されたとはいえ、下級モンスター
やはり太刀打ちできなかったようだ

流転ＬＰ１３００→ＬＰ１２００

「『孤高のブレイブ・ヒーロー』の効果で1枚ドロー！」
「カードをセットしてターンエンド！！」

△
■
３００／２

「ドロー！よし、『エアーマン』召喚！効果でデッキから『キャプテンゴールド』を手札に、『キャプテンゴールド』の効果で『摩天楼』を手札に！」
「れ、連続サーチ！？」
「『摩天楼』発動！『エアーマン』で『ブラックブラッド』を攻撃！『摩天楼』効果により『エアーマン』はパワーアップ！」

フィールドは高大なビルの並ぶ摩天楼となり、その高みから急降下するように攻撃して来る『エアーマン』

Ｅ・ＨＥＲＯエアーマン
ＡＴＫ１８００→ＡＴＫ２８００

大納ＬＰ３００→ＬＰ１００

しかし、ダメージを受けたにもかかわらずその表情に喜びを隠せない様子のダイナ

「（勝った！！）リバース発動、『巨龍跋扈（きょりゅうばっこ）』！！」
「ほうほう！」
「（すまん、相棒）手札を１枚捨て、場のカードをすべて破壊、１枚につき３００ダメージ！！」

倒れながらもじたばたと暴れ周り、周囲のカードを破壊していく『ブラックブラッド・ドラゴン』
その後には、なにも残ってはいなかった

流転ＬＰ１２００→ＬＰ６００

「（もう召喚はしてるから、あとは次のターンに『ドラゴンズサーヴァント』を出せれば！！）」
「ピンチの後にチャンスあり……ってか。『戦士の生還』発動、『バブルマン』を回収！そして自身の効果で特殊召喚！」
「げ！？」
「場と手札が空な時に出すことに成功したから２枚ドロー！」
「ぐう……」

完全に勝った気でいたために少し恥ずかしくなるダイナ

「カードを１枚セットしてターンエンド！」

□
■
１２００／１

「くそっ、ドロー！！」
「さて、何を引いたかな？」

流転の出方を読み違えたため、手札は状況にあったものではない
ドローカードにかかっている

「賭ける！！『巨龍の古戦場』発動！！墓地から『光と闇の竜』を除外、３枚ドローして１枚墓地へ。『シャインパルス・ドラゴン』を墓地へ送る！！」
「来い、ダイナちゃん！」
「『輪廻する巨龍』を発動、墓地から『カオスエンド・ドラゴン』を手札に！！」
「（『巨龍跋扈』の時に捨てたカードか？）」
「墓地の『ブラックブラッド』，『シャインパルス』を除外して……混沌包む闇、『カオスエンド・ドラゴン』を特殊召喚！！」

光と闇の翼を羽ばたかせ、ダイナのフィールドに舞い降りる巨龍
流転の目にも、ダイナの切り札がこのカードだと一目で分かった

「『ドラゴンズサーヴァント』を召喚！！『ドラゴンズサーヴァント』で『バブルマン』を攻撃！！」

手にした剣で『バブルマン』を切り裂く龍人
これで流転を守るモンスターはいなくなったが、いまだ流転の表情にピンチの色は感じられない

「とはいえ……甘い！リバース発動、『ヒーロー逆襲』！手札１枚をランダムに選択、それが『Ｅ・ＨＥＲＯ』なら相手モンスターを破壊して特殊召喚！」
「手札は……１枚！？」

それは、つまり

「当然、『Ｅ・ＨＥＲＯ』だ！『スパークマン』特殊召喚！更に『カオスエンド』を破壊だ！」
「くそっ……カードをセットしてターンエンド！！」

△
■
２００／０

「（これが最後のトラップ……！！）」
「『ワイルドマン』召喚！そのまま『ドラゴンズサーヴァント』を攻撃だ！」

野生児のようなモンスターが、手にした剣を振り下ろす

「リバース発動、『ドラゴニック・プレッシャー』！！このターン、ドラゴン族モンスターと戦闘するモンスターは攻撃力が半分に！！」
「ちっちっちっ！『ワイルドマン』はあらゆる罠を受け付けないぜ！」
「……へ？」

大納ＬＰＬ１２００→Ｐ１１００

「『スパークマン』でダイレクトアタック！」

『スパークマン』の放つ閃光に、ダイナはライフポイントを失った

大納ＬＰ１１００→ＬＰ００００

「ちくしょー！！行けたと思ったのにー！！」
「はっはっはっ！まだまだ受験生如きには加減しても負けんわ！」
「うう……ありがとうございましたぁー」

とぼとぼとリングを後にするダイナ

「（ま、こいつは合格でいいだろうな）」

そんなことを考えていると、後ろで新しいデュエルが始まっていた

――……

……――

対峙しているのは、赤い服の青年と、学制服の少女

「よし、先攻は譲るぜ！！来い！！」

「はい！お願いします！」

赤い制服の青年は、首から『霧原（しんき）（きりはら）神騎』と書かれたネームプレートを首から提げており、対する少女は『２８：焔坂雪美（ほむらざかゆきみ）』と書かれた名札をしていた

「ドロー！」

先攻は雪美

「『氷結界』を発動します！」

雪美が発動したのはフィールドカード
立体映像ではあるものの、二人の周囲は氷に包まれる

「……さぶっ！？」

……立体映像であるため、実際には温度は変わらない

「カードをセットしてターン終わりです！」

■ |
４０００／４

「モンスターなしか……ドロー！！」

ドローカードを確認する

「……よし、行くか。『切り込み隊長』を召喚、その効果で手札の『ミスティク・ソードマンＬＶ４』を特殊召喚！！」
「（モンスター２体…）」

なにやら神騎の場のモンスターの数を気にしている様子の雪美

「行くぜ！！まずは『切り込み隊長』で攻撃！！」
「リバースを発動します！『氷結界の門』！」
「罠か！？」

ぎぃぃ……と重々しい音と共に、雪美の場に現れた青いドアがゆっくりと開く

「相手モンスターの数と同じ☆の水属性モンスター、☆２の『氷弾使いレイス』を特殊召喚します！」
「守備力８００……倒せるか」

今、攻撃宣言したのは『切り込み隊長』
破壊できるのなら、このまま攻撃したいところであるが

「倒せませんよ？」

「……そうか、『氷結界』か！！」
「『氷結界』の効果で、水属性モンスターに攻撃するモンスターは、攻撃力が６００下がります！そして『氷弾使いレイス』は☆４以上のモンスターとの戦闘では破壊されません！」

『切り込み隊長』では攻撃力が足りず、『ミスティック・ソードマンＬＶ４』では☆が高すぎて『氷弾使いレイス』の効果に当てはまってしまう

「なるほど。なら、カードをセットしてターンを終了するしかないな」

△△
■
４０００／３

「ドロー！『氷結界の武士』を召喚します！」
「確かに『切り込み隊長』には勝ってるな」

『氷結界の武士』の攻撃力は１８００
先制ダメージを狙える値である

「いえ、違います！☆４の『氷結界の武士』と☆２の『氷弾使いレイス』をチューニング！」

「し、シンクロ！？」
「『氷結界の龍ブリューナク』！効果発動！」

『ブリューナク』の体から発せられた冷気の渦が神騎のカードを弾く

「なっ！？」
「『ブリューナク』の効果。手札を捨てるたび相手のカードを手札に戻します！『切り込み隊長』以外を手札に！そして『切り込み隊長』に攻撃！」

神騎ＬＰ４０００→ＬＰ２９００

「いくらでもバウンス可能ってか……」
「ターン終わりです！」

△
｜
４０００／２

「ドロー！！……厄介だな、それ」
「はい！エースでもありますから！」

『ブリューナク』自身の攻撃力は高くない
適当にシンクロ召喚すれば対処可能な範囲内だ
しかし、『氷結界』の効果でこちらから攻め込む場合に大きくパワーダウンしてしまう

「……でも、対処法がないわけじゃない！！モンスター、カード3枚をセット！！ターンエンドだ！！」

■
■■■
2900／2

「ドロー！」

この時点で雪美の手札は3枚
つまり、最大で3枚までしか対処出来ない

……『ブリューナク』の効果だけでは

「『コールドツイスター』を発動！セットしてる魔法，罠カードを2枚破壊です！」
「んなっ！？」

吹雪が神騎のフィールドを襲い、カードを破壊していく

「そして残った2枚を『ブリューナク』の効果で手札に戻します！
ダイレクトアタック！」

氷の嵐が神騎を襲う
立体映像（ソリッドビジョン）なので物理的ダメージはないが、その衝撃に思わず構えてしまう

神騎ＬＰ２９００→ＬＰ６００

「っ……！！」
「ターン終わりです！」

△
｜
４０００／０

「ドロー！！」
「（このまま押し切れれば……！）」

単純なライフポイントでは、確かに雪美が有利である
しかし、カードの枚数的に見れば雪美の

「カードを３枚セットしてターンエンドだ！！」

―

■■■

６００／２

「ドロー！うーん……」

雪美の手札は１枚

よって、『ブリューナク』の効果でバウンスできるのは１枚だけとなる

「……よし、『ブリザード・ウォリアー』を召喚！バトルします！」

「リバース発動、『血の代償』！！」

神騎ＬＰ６００→ＬＰ１００

「手札からモンスターをセットする！！」

「（あれは間違いなく『ミスティック・ソードマン』！）」

残り手札から確証を得られる
と、なると『ブリザード・ウォリアー』で荷が重い

「……『ブリューナク』で攻撃！」
「リバース発動、『リバース・ブレイブ』！！攻撃対象となったセットモンスターを攻撃表示に！！さらに攻撃力は８００アップだ！！」

ミスティック・ソードマンＬＶ４
ＡＴＫ１９００→ＡＴＫ２７００

「うそっ！？」

氷の嵐を、その剣圧で吹き飛ばす
一瞬の隙をつき、切りかかる『ミスティック・ソードマン』

雪美ＬＰ４０００→ＬＰ３６００

「ターン終わり……しかないー」

△

―
３６００／０

『ブリザード・ウォリアー』はこのターンに召喚したため、表示形式を変えることは出来ない
つまり、無防備なままその高くない攻撃力を晒さなければならない

「このエンドフェイズに『ミスティック・ソードマン』はレベルアップする！！ドロー！！『コマンド・ナイト』を召喚！！」

ミスティック・ソードマンＬＶ６
ＡＴＫ２３００→ＡＴＫ２７００

コマンド・ナイト
ＡＴＫ１２００→ＡＴＫ１６００

「耐えれる……かな」
「『ＬＶ６』で『ブリザード・ウォリアー』を、『コマンド・ナイト』でプレイヤーを攻撃！！」

ミスティック・ソードマンＬＶ６
ＡＴＫ２７００→ＡＴＫ２１００

雪美ＬＰ３６００→ＬＰ２７００→ＬＰ１１００

「なんとかなったぁ～」

大きく削られたものの、なんとか持ちこたえられたことに安堵する雪美

だが

「いやいや。『レベルダウン！？』発動！！『ミスティック・ソードマン』は『ＬＶ６』から『ＬＶ４』に！！」

ミスティック・ソードマンＬＶ４
ＡＴＫ１９００→ＡＴＫ２３００

「……え？」

「ダイレクトアタック！！」

雪美ＬＰ１１００→ＬＰ０００

「ま、負けちゃったー……」

うな垂れた様子の雪美

「（……ん？『焔坂』？）」

今更ではあるが、気付いた様子の神騎

「同じ苗字っているもんなんだなぁー」

……訂正、まったく気づいていないようだった

そして、４月、桜咲く季節
オシリス・レッド合格、大納剛
同じくオシリス・レッド合格、焔坂雪美

そんな彼らの物語は、ここから始まるのだが

実は彼ら。主人公ではなかったりする

「ならもう１回俺か！！」

それもなかったりする

フェイズ1：僕と私の入学式（後書き）

さてさて。前作主人公とダイナの勝率を比べて見るのも面白いかもしれませんね

フェイズ２：（無限＋地獄）÷２（前書き）

ダイナは主人公ではありません
が、登場回数は多くなる予定です
（特に前半部分）

そんなダイナ君ですが、みれば分かる通り漫画版ＧＸの万丈目よりなデッキを使っています
なので、漫画版ＧＸの万丈目（以後『漫丈目』）が使ったカードをよく使います

漫丈目が使い、かつＯＣＧ化されたカードでも、漫画版テキストを使う場合があります
その場合は、オリカ扱いとし、オリカ集に記載します

……と、長々と書きましたがつまりは。
エンドドラゴン使うけど、シンクロじゃないですよって話

フェイズ２：（無限＋地獄）÷２

桜咲き、花乱れる春―４月

ガヤガヤガヤ……ざわざわざわ……

まだ日も昇り始めた、朝
新入生説明会の会場として用意された大講義室に集まっている新１年生
みな、試験に合格したつわものたちである

「兄（あん）ちゃんいないなぁー」

呟くのはダイナこと大納　剛
知り合いがいないために、言ってしまえば暇なのだ

周囲を見回しても、赤黄青……と信号の色いい加減、飽きてきた

そんな時

「……あれ？」

恐らく、唯一
ダイナが知っている人物

「まさか……白羽(しらは)カイトさん！？」

アンダー15大会優勝、『青眼の白龍』使いの白羽カイト

自分と同じドラゴン使いであるという事を除いても、知っているであろう有名人

「うっわー！！やばい、テンションあがってきた！！」

真っ白なスーツのような服
カイトの大会でのいつもの服装である

『今度見に行こう』などという野次馬的思考を思っていると、1人の赤い制服の少女が教師たちを引き連れ現れた

「新入生のみなさん、こんにちわ」

うやうやしくお辞儀をする少女
新入生の7割程は、その少女を知っていた

このデュエルアカデミア学園長である静馬蛮(しずまばん)の唯一の子供である静馬悠(ゆう)である

「ぼ…私の名前は静馬悠、オシリス・レッド二年です。ご存知の方が多いかも知れませんが、学園長である静馬蛮は私の父です」

一瞬、自分を『僕』と呼びそうになったようだがすぐに修正している

「父が諸事情であまり表に出てこれないいので、今年から私が学園長代理となりました」

そういうと、隣にいただらしのない風貌の教師から、黒いジャケットを受け取り着る

・・・・・

「「「なにぃー！！」」」

「今年から、去年まであった『パートナー制』が廃止されました。

他には――……

……――

オシリス・レッド寮
時間帯的には普通に授業時間内なので、集められた1年生以外の生徒は、ほぼいない

「えー、オシリス・レッド学生代表の霧原神騎、2年だ。たぶん、実技とかで会ったことある人もいるかもしれないけどよろしくな！！」

唯一寮に残っている上級生、神騎の自己紹介が終わり、ぱちぱちぱち、とまばらな拍手が起きる

「去年までは御魂（みたま）先生が寮長だったけど、いろんな事情で新しい先生が寮長になりました」

隣にいた、銀髪の青年に話を振る

「おはようございます」

物腰はとても柔らかである
ほっそりとしており、何故かへそだしの服装をしている
女子の反応を見る限りセーフ――いや、むしろ『よくやった！』といった反応だ

「今年から教師としてきました。柳京（やなぎやこ）と言います。女性みたいいな名前なので、苗字で呼んでくれるとうれしいかな」

困ったように照れ笑いをする柳
女子からの歓声がいっそう増す

「んじゃ、柳先生の自己紹介もかね、て……と」

誰かを探すように1年生を見回す神騎

「お、いた。ダイナ、こっち来い」
「え！？」

神騎の手招きに応え、前に出るダイナ
この時、白羽の表情が少し曇ったのには気づかなかったようだ

「じゃ、柳先生とダイナでデュエルしてもらいましょうか！！」

2人を押すように寮の外へ連れ出す
他の生徒たちも後をついてくる

「大納君でしたね？」
「あ、ダイナで良いです」
「では、ダイナ君。お願いします」
「あ、こちらこそ」

十分な距離を開け、対峙する2人
周囲には既に、立体映像装置（ソリッドビジョン）が展開している

「「デュエル！」」

「では、私のターン。……ドロー」

先攻は柳

「なかなかの手札です」
「いや、言っていいのかよ」
「あ、すみません。思ったことがすぐ口に出る性格でして」

特に後悔した様子も見られないことから、だいぶ前から自覚しているらしい

「カードゲームに向いてねぇ……」

「では、続けます。カードを5枚セット」
「5枚ぃ！？」
これで柳の魔法，罠ゾーンは全て埋まってしまったことに

「『インフェルニティ・リサーチャー』を守備表示で出します。ターン終了」

□

■■■■■
4000／0

柳が出したのは、頭に小さな角の生えた子鬼のモンスター

「いきなり手札全部使ってくるとか……」
「『インフェルニティ』モンスターは手札があると効果が使えないので」

どうやら柳は【インフェルニティ】デッキのようだ

「ドロー！！『仮面竜』を守備表示で召喚！！カードをセットしてターンエンド！！」

□

■
４０００／４

戦闘を行わなかったダイナ
純粋に、攻撃力が足りなかったからなのか。それとも『インフェルニティ・リサーチャー』を警戒したのか

「ドロー」
「（これで今は手札１枚か……）」

柳がドローしたカードが魔法，罠カードや最上級モンスターであれば、今の柳の場では消費しづらいであろう

「『リサーチャー』をリリース、『インフェルニティ・デストロイヤー』をアドバンス召喚です」
「手札０枚……くっ」

子鬼が悪魔となって、ダイナの前に立ちふさがる

「行きます、バトルフェイズです。『デストロイヤー』で『仮面竜』に攻撃します」

パンチのように腕が突き出される
『仮面竜』はその衝撃で粉々に破壊される

「『仮面竜』の効果発動！！デッキから」
「カウンター罠発動です。『インフェルニティ・バインド』、この効果は手札０枚――ハンドレス時に使える『天罰』です」
「効果無効だって！？」

破壊される『仮面竜』に対して、捕縛ネットのようなものが被される
これでは効果は使えない

「更に『デストロイヤー』の効果、このカードがモンスターを破壊するたびに１６００ダメージを相手に与えます」
「んなっ！？１６００！！」

大納ＬＰ４０００→ＬＰ２４００

「いってぇ……」
「ターン終了です」

△
■■■■
４０００／０

ライフポイントのおよそ1／3を一度に削られる
いくらその効果が手札0枚――ハンドレス状態でなければ有効でないとはいえ、1度通されるだけで十分な痛手だ

「ドロー！！リバース発動、『不死の竜』！！」
「カウンター罠発動です。『インフェルニティ・トラップロック』、この効果は専用の『盗賊の七つ道具』です」

ダイナの場の『不死の竜』のカードが弾かれ、デッキに戻る

「罠カウンターかよ……『バイス・ドラゴン』特殊召喚！！更に『ドラゴンズ・サーヴァント』も特殊召喚だ！！」
「とうとうリリース確保に成功しましたか……」

いまだに通常召喚はしていない
2体のドラゴンをリリースとして、最上級ドラゴンを召喚するチャンスだ

「2体をリリース、来い！！『光と闇の竜』！！『デストロイヤー』に攻撃だ！！」「リバース発動、『ゼロ・リバース』」
「無効！！」

光と闇の竜
ＡＴＫ２８００→ＡＴＫ２３００
ＤＥＦ２３００→ＤＥＦ１８００

柳が発動したカードは、闇に飲まれて消える

「ええ、分かってます。しかしこれで攻撃力は『デストロイヤー』と互角、つまり相打ちです」

光の波動を突き破るように突撃してくる『デストロイヤー』
その１撃が『光と闇の竜』と突き破る頃には、自身も消滅していた

「構わない！！『光と闇の竜』の効果で『バイス・ドラゴン』が復活する！！追撃だ！！」
「罠発動、『インフェルニティ・リバース』。『デストロイヤー』は復活します」

炎のブレスから柳を守るように現れる『デストロイヤー』
突撃しようとしていた『バイス・ドラゴン』は動きを止める

「ぐっ……！！カードを２枚セットしてターンエンドだ！！」

△
■■
２４００／０

「私のターンです。『インフェルニティ・リバース』の制約効果。このカードをコントロールする限りドローフェイズをスキップ」
「ドロー出来ない……つまり手札は０のまま……！！」

手札を増やせない事は本来は大きなデメリットである
しかし、柳のこのデッキでは、それがデメリットとして機能していない

「そうなりますね。『デストロイヤー』で『バイス・ドラゴン』を攻撃」

大納ＬＰ２４００→ＬＰ２１００

「そして更に『デストロイヤー』のモンスター効果も発動」

大納ＬＰ２１００→ＬＰ５００

「きっつ……」
「ターン終了」

△
□■
４０００／０

いまだにダメージなしの柳
対してダイナは序盤から追い詰められっぱなしである

「賭ける……ドロー！！『未来視の宝札』発動！！お互いにデッキトップから3枚をめくり1枚を手札へ、他を墓地へ送る！！」
「ハンドレス状態を崩されましたか」

強制的に柳に手札増強を行う
これで、柳の『インフェルニティ』は効果を失った

「『ビットチャージ』発動！！2枚ドロー！！」

大納ＬＰ５００→ＬＰ１００

「変わりに４００のダメージと2回のドローフェイズスキップを受ける」
「本当に賭けに出ましたね」

２回のドローフェイズスキップ
反撃のチャンスを自ら２ターン潰した事と同意義である

「ああ。リバース発動、『死者蘇生』！！『バイス・ドラゴン』を特殊召喚！！」
「そのセットはブラフでしたか」

特に警戒していた様子はなかった柳だが、少し驚いたようだ

「『ドラゴンズ・サーヴァント』を特殊召喚！！２体をリリースして『ダークエンド・ドラゴン』を召喚だ！！」
「再び最上級モンスターですか……流石ですね」

これが最上級ドラゴン特化型デッキ――ダイナのデッキである

「『ダークエンド』の効果発動！！」

ダークエンド・ドラゴン
ＡＴＫ２６００→ＡＴＫ２１００
ＤＥＦ２１００→ＤＥＦ１６００

「攻守５００と引き換えにモンスター１体を墓地へ送る！！」
「かかりましたね」
「え？」

柳の表情が、少し意地悪そうなものに変わる

「罠発動、『インフェルニティ・バーンラッシュ』。コストとして相手は１枚ドローしますが、墓地へ送られた『インフェルニティ』の攻撃力だけダメージを与えます」
「何だって！？」
「『デストロイヤー』の攻撃力は……ってライフポイントは１００でしたね」
「くっ……」

たった１００
半端な回復カードでは追いつかない

「ドロー！！」
「『インフェルニティ・バーンラッシュ』の効果です！」
「いいや、まだだ！！」

柳のカードから飛ばされた黒い弾丸は、白と黒の羽に阻まれる

「『カオスエンド・ドラゴン』の効果発動！！このターン、俺はダメージを受けない！！」
「そんな！いったいどこから！？」
「『インフェルニティ・バーンラッシュ』のコストで引いたカードだ！！」

コストなので、発動の時点でダイナはドローした
このタイミングでのドローなので、『インフェルニティ・バーンラッシュ』にチェーンして発動できたのだ
しかも『カオスエンド』の効果発動条件であるダメージは『ビットチャージ』で受けている

「『ダークエンド』でダイレクトアタック！！」

黒いブレスに身を震わせる柳

柳ＬＰ４０００→ＬＰ１９００

「くっ……」
「ターンエンドだ！！」

△
└■
１００／０

柳にダメージを与えた事で、女子からダイナへの目線が冷たいものになる

「ドロー」
「『インフェルニティ』は確かに強いのかもしれない！！でも、手札０枚からの逆転は至難の業だ！！」

『インフェルニティ』
確かに攻めの時はその攻撃的な効果で強いかも知れない
しかし劣勢に陥ると、使える手札が０なので脆いところがある

「ハンドレス状態でドローしたため、『インフェルニティ・デーモン』を特殊召喚」
「んなっ！？」

とはいえ、そんな弱点を放って置くような人物ならばアカデミアの教師になれるわけもない

「『デーモン』の効果によりデッキから『デストロイヤー』を手札へ。『デーモン』をリリースし『デストロイヤー』を召喚」
「マジかよ……」

攻撃力の差は、２００

「『デストロイヤー』で『ダークエンド』を攻撃」

大納ＬＰ１００→ＬＰ００００

「ああー、もう負けたー！！」
「ありがとうございました」

（主に女子からの）拍手の中、デュエルは終わった

「んじゃ、これから本校舎の中でも見ていきましょうかー」

そう言うと、生徒たちを引率しながら本校者の方へと進む神騎

まだまだ1日は長い

フェイズ2：（無限＋地獄）÷2（後書き）

柳京

キャラクターイメージはもちろん

『鬼柳京介』

……後悔や反省はしていない

フェイズ3：僕のクラスメートを紹介します（前書き）

ダイナの一人称、『俺』だよね……どうもこんにちは

あれですね、結末を考えた上でデュエル書くのは難しくないですが、結末まで出来上がってしまったデュエルをピンポイントに書き直すのって辛いですね

それはそうと
実はこの作品、アクセス解析を見てみると未だにアクセス0人となっています

・　・　・　そんなバカな

フェイズ3：僕のクラスメートを紹介します

「デュエル！」
「デュ、デュエルです」

元気はつらつなダイナに対し、おっかなびっくりな対戦相手――友(とも)船遊子(ふなゆうこ)
簡単にいうならクラスメートだ

「私のターンですよね？」
「お、おう」

スカットしない遊子にテンポが崩れるダイナ

「ドロー。『ツーバリアン』を守備表示で召喚します」

遊子が召喚したのは、薄いガラスのような盾を両手に持つ機械モンスター

「ターンエンドです」

□

―
４０００／５

今はお昼も過ぎた、そんな頃
『クラスの仲間のことを知ろう！！』ということでクラスメート同士によるデュエル交流会なのだ
※発案者：神騎

「守備力１６００……地味に高いな……ドロー！！」
「『ツーバリアン』には、１度だけですが守備力を半分にして破壊を無効にできる効果があります」

律儀にも効果の説明をする遊子
ちなみに、カード情報はデュエルディスクを経由して見られるのでわざわざ説明する必要などなく、知らなくても見なかったほうが悪いのだ

「なら！！『ツインヘッド・ドラゴン』を妥協召喚！！」
「え？☆６なんじゃ……？」

自分のデュエルディスクに表示された情報に、首を傾げる
通常なら、☆５以上のモンスターの通常召喚にはリリースが必要となる

「『ツインヘッド』はリリースなしで召喚できる！！……能力半分になるけど」

ツインヘッド・ドラゴン
ＡＴＫ２２００→ＡＴＫ１１００

「でも☆は変わらない！！『ドラゴンズ・エヴォリューション』発動！！『ツインヘッド』をリリースし、☆７モンスター……『ブラックブラッド』を特殊召喚！！更に『ドラゴンズサーヴァント』を特殊召喚！！」
「あうぅ……」

いきなりの最上級モンスターの登場に萎縮してしまう遊子

「『ブラックブラッド』で『ツーバリアン』を攻撃！！」

ツーバリアン
ＤＥＦ１６００→ＤＥＦ８００

本体は無事ながらも、片方の盾が割れてしまう

「８００ならこいつでも倒せる！！『ドラゴンズサーヴァント』でもう１度攻撃！！」

「『ツーバリアン』がぁ……」

2度目の攻撃には耐え切れなかったようで、本体もろとも破壊される

「カードを1枚セットして、ターンエンドだ！！」

△△
■
4000／1

「ど、ドロー」

手札を見ながら唸っている遊子

「……仕方ないです。『デブリ・ドラゴン』を召喚、その効果で『ツーバリアン』を蘇生します」

「『デブリ・ドラゴン』？」

初めて聞くカードに、テキストを確認する

「ってチューナーかよ！？」

つまり、次に遊子が行うのはシンクロ召喚

「あ、はい。でもシンクロ召喚はしないので」
「え、持ってないの？」

……ではなかった
どうやら、壁兼蘇生効果として使っているようだ

「『右手に盾を左手に剣を』を発動します」
「げ！？」

攻守入れ替えの一発逆転カード
遊子のモンスターは総じて守備力が高いため、その爆発力は大きい

デブリ・ドラゴン
ＡＴＫ１０００→ＡＴＫ２０００
ＤＥＦ２０００→ＤＥＦ１０００

ツーバリアン
ＡＴＫ０→ＡＴＫ１６００
ＤＥＦ１６００→ＤＥＦ０

ブラックブラッド・ドラゴン

ＡＴＫ２６００→ＡＴＫ２１００
ＤＥＦ２１００→ＤＥＦ２６００

ドラゴンズサーヴァント
ＡＴＫ１４００→ＡＴＫ１２００
ＤＥＦ１２００→ＤＥＦ１４００

「カードをセットして、『大嵐』を発動します」

何故か自分のカードを巻き込む遊子

「チェーンして『表裏一体』発動！！『ブラックブラッド』をリリースして同じ☆の光ドラゴン、『シャインパルス』を特殊召喚！！」
「私は『リミッター・ブレイク』が破壊されたことでデッキから『スピード・ウォリアー』を特殊召喚します」
「へぇ……正直、単なるボケたやつかと思ってたよ」

長髪ではない遊子
だからだろうか？寝癖が１箇所跳ねている
他にもジャケットのボタンが掛け違えていたり、ポケットの中が出ていたり等等
しっかりしているわけでは決していないだろうが

「酷いです……。『団結の力』を『デブリ・ドラゴン』に装備しま

す」
「んなっ！？」

デブリ・ドラゴン
ＡＴＫ２０００→ＡＴＫ４４００
ＤＥＦ１０００→ＤＥＦ３４００

「行きます。『デブリ・ドラゴン』で『シャインパルス』を攻撃します」

大納ＬＰ４０００→ＬＰ２２００

「ぐっ……！！」
「次は『ツーバリアン』で『ドラゴンズサーヴァント』です」

大納ＬＰ２２００→ＬＰ１８００

「まずっ……」
「最後は『スピード・ウォリアー』です」

大納ＬＰ１８００→ＬＰ９００

「あ、あぶねぇ……」

間一髪、といいったところで繋ぎとめたダイナ

「ターンエンドです」

△△△
□
４０００／１

デブリ・ドラゴン
ＡＴＫ４４００→ＡＴＫ３４００
ＤＥＦ３４００→ＤＥＦ２４００

ツーバリアン
ＡＴＫ０１６０→ＡＴＫ０
ＤＥＦ０→ＤＥＦ１６００

『右手に盾を左手に剣を』の効果がきれ、モンスターのステータスが元に戻る
とはいえ、『団結の力』までは消えないので依然として『デブリ・ドラゴン』が立ちはだかっている

「くっ……頼むぜ相棒！！ドロー！！」
「相棒、ですか？」
「おう、このカードがな！！墓地の『ブラックブラッド』，『シャインパルス』を除外！！終焉をよぶ混沌よ！！『カオスエンド・ドラゴン』！！効果発動！！」

デブリ・ドラゴン
ＡＴＫ３４００→ＡＴＫ９００

「あっ、『デブリ・ドラゴン』が」
「モンスター１体の攻撃力を俺のライフポイントと同じにする！！『カオスエンド』で『デブリ・ドラゴン』に攻撃！！」

遊子ＬＰ４０００→ＬＰ２１００

「はうぅ……」
「ターンエンドだ！！」

△
｜
９００／０

「ドロー……モンスター２体を守備表示に変えてターンエンドです

う」

|□□

|

2100／2

力なくエンド宣言する遊子
どうやら反撃の手は整ってないらしい

「俺のターンドロー！！『仮面竜』を召喚！！2体に攻撃だ！！」
「きゃん！？」

なんの抵抗もなく、遊子の場はがら空きになる

「ターンエン
「さ、されんだー！」

あわててサレンダー（こうさん）する遊子
どうやら、諦めたらしい

「お、おう。ありがとうございました」
「ありがとうございました。強いですね、大納さん」
「ダイナな」

「……」

ダイナの微妙すぎるこだわり（微妙なイントネーションしか変わらない）に若干戸惑う遊子

「えっと……た、たしか冴神先輩と戦って良いところまで追い詰めたとか」

「いや、全然だった」

「……え？」

「あの人、絶対手加減してた。あんなの勝てなきゃ駄目だったんだよ」

強く拳を握るダイナ

その拳、瞳、声から悔しさがにじみ出ていた

「……強いですね」

「え？負けてるのになんでそうなるの？」

「あ、あの！」

「（あ、返事ないんだ）」

「お友達になってもらえませんか？アカデミアに知り合いいないんです」

「へー、そうなのか」

ダイナは実家が近所で昔から兄弟のように仲がよかった神騎が、そして神騎つながりで悠と若干の面識がある

そうでなくてもこの性格だ、友人には困らないだろう
しかし、おとなしい性格の遊子では、きっかけがなければ切り出すことすら難しいだろう

「まぁ、全然いいぜ。これからよろしくな！！」

……などといった事情からではなく、ただ純粋に『友達になる』という行為に抵抗がないだけのダイナ

「はい、お願いします！」

むしろ同情からの友人でないほうが遊子にとっても良いだろう

「あ、そうだ！！せっかくだし、他の人ともデュエルしてきなよ！！」
「え、えええ！？」

無理やり背中を押すダイナ

「えーっと、そこの！！」
「『そこの！！』って私？」
「そう、そこの『私』」

ここで女の子を選んだのがダイナの優しさなのか、偶然なのかは定かでないが、とりあえず遊子にとっての唯一の救い

「こいつとデュエルしてよ！！」
「……へ？」

押しかけてきておきながら、自分ではなくしどろもどろしている連れにデュエルをさせる

「（嫌がらせ？）」
「んじゃ！！」
「えええ！？大納さん！？」
「『ダイナ』なー！！」

妙なこだわりだけ残して去っていったダイナ

「「・・・・・」」

奇妙な沈黙が2人の間に流れる

「えっと……私、焔さ――……

……――

２人の間に微妙な雰囲気が漂っていることなど気づかず――気にもせず自分の次なる対戦相手を探すダイナ

「大納　剛、だね？」

不意に後ろから呼び止められる

「はい？」

声をかけてきたのは

「白羽　カイトだ、よろしく」

「し、白羽さん！？」

アンダー１５大会優勝者、このアカデミア１年の中でも抜きん出て有名なドラゴン使い

ダイナが知らないわけがない

「大会見てました！！凄かったです！！」
「あー……どうも。で、僕からも話があるんだけど？」
「はい？」

何度も言っているが、白羽は有名人だ
対してダイナは別に大会優勝経験があるわけでもない
ましてや有名企業の子息というわけでもない
絶対ない。と、いうより普通ない

わざわざ名指しで質問される覚えはない

「神騎先輩とはどういった関係なんだ？」
「は？」
「いや、顔見知り……以上に知り合いみたいだったんだが」

『まるで彼女みたいな事聞くな』、などと思うダイナ
と、ある案が浮かぶ

普通に答えてもつまらないではないか

「デュエルで勝ったら教えます」
「なにっ！？」

ダイナの予想外の答えに誰が見てもベタなリアクションで返す白羽

「ここはデュエルアカデミアです。全てはデュエルで決める……どうですか？」

白羽は考える
わざわざこんな回りくどいやり方をとる大納
『神騎の実家が近所で昔から付き合いがあった』、とは師匠（しんき）本人から聞いてはいるものの、『本当はそうじゃないのか？』と疑ってしまう

「（これなら白羽さんとデュエル出来そうだな）」

事実そうなのだが、そんなことは白羽は知らないわけで

「……面白い、乗った！」
「（っしゃ！！）」

ダイナが心の中でガッツポーズをとったことも知らず、リングへ向かうのだった

「お願いします！！」
「ああ、よろしく」

「「デュエル！」」

白羽のデュエルともあって、数人の目を引きながら2人のデュエルが始まった

「ドロー！」

先攻は白羽

「『伝説の白石』を守備表示で召喚！カードを1枚セットしてターンを終了だ！」

□

■

4000／4

「（『伝説の白石』……破壊されたら『青眼の白龍』を手札に呼ぶ）」

白羽のデッキは【青眼の白龍】デッキ

サーチされるのは、都合が悪い

が

「なら……速攻だ！！ドロー、『ツインヘッド・ドラゴン』を召喚！！」

ツインヘッド・ドラゴン
ＡＴＫ２２００→ＡＴＫ１１００

「攻撃力下げるだと……どういうつもりだ？」

攻撃力１１００では、おおよそ戦闘は期待できない
確かに『伝説の白石』は破壊できるが、それなら他の下級モンスターで事足りる

「『ドラゴンズ・エヴォリューション』発動！！☆６の『ツインヘッド』をリリースし、手札から☆７の『ブラックブラッド・ドラゴン』を特殊召喚する！！」
「なるほど、単なるコストか！」

対遊子でも使った戦術
おそらく、白羽は見ていなかったのだろう

「バトル！！『ブラックブラッド』で『伝説の白石』に攻撃！！」

卵のような薄い殻が粉みじんに粉砕される

「『伝説の白石』の効果、デッキから『青眼の白龍』を手札に加える！」

白羽が『これで準備は整った』などと考えていると

「追撃！！速攻魔法、『表裏一体』発動！！」

「なにっ！？」

「『ブラックブラッド』をコストに、『シャインパルス』を特殊召喚する！！ダイレクトアタック！！」

白羽ＬＰ４０００→ＬＰ１４００

思わぬ追撃に手痛いダメージを受けてしまう

「そして『シャインパルス』の効果！！与えたダメージだけ回復！！」

大納ＬＰ４０００→ＬＰ６６００

「くっ……大幅に差をつけられたか」
「ターンエンドだ！！」

△
｜
６６００／１

宣言通り、速攻で攻め込んだダイナ
しかし手札は既に１枚、『シャインパルス』が生命線である
その攻撃力は２６００、と下級モンスターでは容易に越えられない
値だが……

「ドロー！、リバースカードオープン、『リミット・リバース』！」
「蘇生カードだったのか！！」

蘇生カードとは思ってもいなかったのだろう
しかも、蘇生したのは戦闘力の欠片もない『伝説の白石』だ

「そして『サファイアドラゴン』を召喚だ」
「（攻撃力は『シャインパルス』の方が上……どうくる？）」

「『伝説の白石』で『サファイアドラゴン』をチューニング！」
「チューニング！？」

『伝説の白石』が一筋の光となって、『サファイアドラゴン』を包む

「青き瞳に宿すは伝説の魂、結晶の輝きに集え！シンクロ召喚、『青眼の結晶龍（ブルーアイズクリスタライズドラゴン）』！！

白羽の場に、『青眼の白龍』を模した水晶の龍が現れる

「す、すげぇ……」

「墓地に送られた事により、『伝説の白石』の効果で『青眼の白龍』を手札へ。『青眼の結晶龍』の効果、手札の『青眼の白龍』を捨てる度に攻撃力がアップする！」

「っ！？そうか、手札に『青眼の白龍』が！！」

白羽の真意に気づく

『伝説の白石』を使いまわせれば、それだけ『青眼の白龍』をサーチ出来る

３０００を誇る攻撃力だ、多少のライフポイントの差など1発で吹き飛ばせる

そして通常モンスターである『青眼の白龍』は、手札に存在するより墓地に存在したほうが多彩な蘇生カードで展開しやすいのだ

「そう、『伝説の白石』の効果で2枚だ！2枚の『青眼の白龍』を捨てる！」

青眼の水晶龍
ＡＴＫ２２００→ＡＴＫ３２００

「んなっ！？３０００オーバーだって！！」
「『青眼の結晶龍』で『シャインパルス』に攻撃！」

ダイナＬＰ６６００→６０００

「ああ！？」

これでダイナの場は空になってしまった

「カードをセットしターンエンドだ。『青眼の結晶龍』は破壊される」
「なんだって……破壊！？」

いくらなんでも自壊するモンスターは使いにくいだろう、などとダイナが考えていると

「『青眼の結晶龍』が破壊された事により、『青眼の白龍』が蘇る」

「なっ！？とうとう来たか……」

当然、意味もなく出したわけではなかった

△

■

１４００／３

「早いうちに対処しないと……ドロー！！」

「（せめて来るか……？）」

「エンドだ！！」

「？」

｜

｜

６０００／２

勢いづいた割には打開策は用意できず、大量のライフポイントに任せてターンを稼ぐしかないダイナ

「ドロー……よし」

「っ、まずそうな感じ！！」

しかし白羽の攻めは止まりそうにない

「『おろかな埋葬』を発動。『青眼の白龍』を墓地へ送る」
「……そうか！！蘇生か！！」

セットカードが『正統なる血統』なら、ダイナのライフポイントはちょうど0
ゲームオーバーだ

「違うな」
「へ？」
「『龍の鏡』発動！墓地から2枚、場から1枚『青眼の白龍』を除外！」
「ま、まさか……」

『青眼の白龍』3体融合
それは神をもしのぐ、まさに『究極』のモンスターの呼び水

「『青眼の究極竜』、融合召喚！」
「攻撃力４５００……化け物じゃねぇかよ！！」
「ふっ……『青眼の究極竜』でダイレクトアタック！」
「げっ！？」

今、ダイナの場にはカード1つない

つまり

「無防備なその場に叩き込め！アルティメット・バースト！」

「がっ！？」

ダイナＬＰ６０００→ＬＰ１５００

「あ、あっぶねぇー」

初期ライフポイントをも上回る強烈な１撃

『シャインパルス・ドラゴン』の効果による回復がなければ、一瞬でゲームエンドだ

「カードを２枚セットしてターンエンドだ」

△

■■

１４００／１

「どうする……」

ダイナの手札に『青眼の究極竜』を破壊する手段は揃っていない

仮に上級モンスターを出しても、そのほとんどが壁にしかならない

「ドロー！！」

そう、一部を除けば

「……」
「どうした？サレンダーか？」
「白羽さんの切り札、やっぱり凄いカッコイイです」
「それはどうも」

自分の切り札を褒められ、自慢げに応える白羽

「今度は俺の番です！！墓地の『シャインパルス』，『ダークエンド』をゲームから除外！！混沌包む闇、『カオスエンド・ドラゴン』！！効果発動！！」

青眼の究極竜
ＡＴＫ４５００→ＡＴＫ１５００

「なっ！？」
「『カオスエンド』の効果、相手モンスター1体の攻撃力を、俺のライフポイントの値にする！！」

「（なるほど、ピンチに生きる効果か）」

攻撃力を1／3に落とされたにもかかわらず、割と落ち着いた様子の白羽

「いっけー！！『カオスエンド』で『究極竜』を攻撃！！」
「リバース発動、『融合解除』！」
「しまっ……あれ？」

『融合解除』は融合モンスターをエクストラデッキに戻し、その素材となったモンスター一式を墓地から呼び戻すカード
本来ならここで『青眼の白龍』3体が襲い掛かってくるのだが

「な、なんで！？」

白羽が融合召喚に使用したのは、『龍の鏡』
それは素材をゲームから除外して融合を行うカード
『融合解除』で呼び戻す素材モンスターは、墓地にはいない

「甘いな。更に、リバース発動！『異次元からの埋葬』！これのより、『青眼の白龍』3体を墓地へ戻す！」

チェーンは詰まれた順の逆に処理される
つまり

「なっ！？……つまりは？」

よく分かっていないダイナ

「『青眼の白龍』3体は墓地へ送られ、『融合解除』の効果で『青眼の究極竜』の融合は解除される！」
「げっ！？」

立ち並ぶ3体の『青眼の白龍』
迎え撃つ手段は……

「攻撃中止！！カードをセットしてエンドだ！！」

△
■
1500／1

「ドロー」

ダイナの目を見る
場には、攻撃力で『青眼の白龍』には及ばない『カオスエンド・ドラゴン』が1体
迎撃する効果はない
だが

「……なるほど。バトルだ！『青眼の白龍』の攻撃、滅びのバーストストリーム！」

ダイナＬＰ１５００→ＬＰ１３００

「くっ……相棒はやられたけど、ただじゃ終わらない！！リバース発動、『巨龍跋扈』！！手札１枚を捨て、場の全てのカードを破壊する！！」
「（やかり罠だったか）」

白羽ＬＰ１４００→ＬＰ５００

「カードをセットしてターンエンドだ」

■ |
５００／１

「ドロー！！」

『青眼の白龍』３体を１度に破壊できたが、ダイナのコントロールするカードはこのドローカードのみ
今、この瞬間に使えないカードであれば即エンドだが

「（『仮面竜』か）」

このデュエルで初めて引いた『仮面竜』
デッキにはあと３枚眠っているので、その効果を考えれば少なくとも４回の壁にはなるが

「決める！！『仮面竜』召喚！！ダイレクトアタック！！」
「攻めてきたか……リバース発動！」

その表情は、相手が罠にかかってきたことに対する笑みというよりは、相手が期待通りだったことに対する満足に見える

「『正統なる血統』！蘇れ、『青眼の白龍』！」
「うぐっ！？……エンドだ」

△
―
１３００／０

「ドロー。攻撃、滅びのバーストストリーム！」

ダイナＬＰ１３００→ＬＰ０００００

「あー、楽しかったー！！」
「ああ、僕もだ」
「でも手加減されたのがなぁー」
「ばれていたか」

『異次元からの埋葬』と『融合解除』は共に速攻魔法
手札に引いたターンから発動できる

つまり、『青眼の白龍』３体は本来は白羽のターンに現れていたはずなのだ

「で、聞きたいのなんでしたっ「神騎先輩との関係だ」

質問をさえぎる程の即答で返す

「家が近くて、昔からの知り合いで、家族ぐるみの付き合いで、で、で……兄貴みたいな感じ？」
「兄貴か、そうか」
「？」

『兄貴』の単語になにやら反応する白羽

「兄k「はーい、そろそろ終わりにしますよー！」

場を取り仕切る柳の声

「それでは」

手を振り去る白羽

「あー……」

どうにも聞きそびれてしまったようだ

「知ってのとおりですが、荷物は既に部屋に運んでいます。部屋は相部屋なので、同室者の人と仲良くしてくださいね」

『男女が一緒になることってないんですか？』と、誰かが笑いながら聞く
当然、冗談なのだが

「前例ならありますよ」
「あ、ばか、やめっ！！」
「ね、神騎君？」

異様な神騎の慌て様

周囲が不穏な空気に包まれる

「えーっと……部屋にいくぞー！！」

下手なごまかしというのは、場合によってはＹＥＳよりも肯定となる

――……

……――

「ここか」

とある部屋にたどり着く
何の変哲もない、他と変わらない部屋だ

「ん？」

ドアノブを握り、気づく
鍵がかかっていないのだ

「（先越されたか）」

『ドッキリでも仕掛けようか？』などと（少し）考えていたため、
がっかりなダイナ
気持ちを切り替え、開ける！

「どうもー！！ダイナです！！」
「なんだ、ダイナか」
「へ？」

部屋の中にいたのは、白羽カイトだった

「同室か……長い付き合いになるな。よろしく」

「よ、よろしくどうも」

予想外の相手に、変な返事をしてしまうダイナであった

フェイズ３：僕のクラスメートを紹介します（後書き）

そういえば、ダイナ初勝利？

フェイズ４：ＤＶＤ論争（前書き）

うーん、いいサブタイトルが思いつかない……こんばんは

前作ことＴＡの連載開始からもう１年と半年がたちました、時間って早いですね

ＴＡを書き始めた頃、このサイトに遊戯王作品はほとんどなく（いくつかの短編と連載が１つ２つ程度）、今のこのラインナップの多さに感慨深いものがあり、ライバルの多さに凹みもあり

まぁ何はともあれ４話です。これでＳＦ第一部の１／３が終了（予定）です

まだ主要キャラ出来ってませんが（待て

第二部から、主人公が主人公らしく前に出てきます

今はダイナが前に出てます

が、ダイナは主人公ではありません

……ところで主人公の定義ってなんでしょう？（待て

あれですね、結末を考えた上でデュエル書くのは難しくないですが、結末まで出来上がってしまったデュエルをピンポイントに書き直すのって辛いですね、って２度目ですね

フェイズ４：ＤＶＤ論争

アカデミア生活も数日が過ぎた
こういう集団生活を行うと、おのずとグループができるというものであり

「あ、ダイナさん。おはようございます」
「おはよーダイナ」
「おう、遊子に雪美」

焔坂雪美（ほむらざか）――２年の焔坂紅衣（くれい）の妹である
いつ知り合ったのかというと、実は雪美と遊子が同室であったり昨日の交流会で２人が戦っていたりと、つまりは遊子繋がりの仲なのである

顔なじみとなった３人、こうして朝の食堂で顔をあわせ挨拶するのが毎日となっており

「そういえば白羽さんは？」

その輪の中には白羽もいるのだが

「あー、まだ寝てる」
「休日だからってだらけすぎね……」

ため息混じりに1言
と、何かを閃いた雪美

「ねぇねぇ、寝起きドッキリしかけましょう！」
「あ、面白そうじゃん！！」

テンション高く白羽（とダイナ）の部屋に向かう二人
少し慌てながらその後を追う遊子

食堂から目的地までは遠くないのであっというまにたどり着く

「（それじゃー行きますよー）」
「（はーい！！）」
「（いいんですか？こんなことして……）」

小声での会話
白羽を起こさないためだろうが何も遊子まで小声で話す理由はない

「（じゃあ……）」

ゆっくりとドアノブに手を伸ばす雪美

慎重に、音を鳴らさないように
ドアノブを握り

ガチャッ！

「「「！！！」」」
「お前たち……なにをしているんだ？」

雪美がドアノブを握った瞬間、白羽が先にドアを開けたのであった

「あは、あはははは……」

微妙な空気が漂う

「とりあえず、そこは通路だ。中に入れ」

白羽に言われるとおり、部屋の中に入っていく3人であった

――……

……――

「……で、何の用だったんだ？」

ほんの少し、イライラが感じられる白羽

「その……寝起きドッキリのようなことをしようとしてたみたいです……２人で」

「「ああ！？」」

しっかりと自分は容疑者から外している遊子

「……なんだ、そんなことか」

お咎めはなかったようだが、内心馬鹿にされているようではあった

「それにしても珍しいわね、こんな時間に起きているなんて」

現在時刻１０時過ぎ

ちなみに、いつもの白羽の休日の起床時間は１２時前である

「今日は待ち人がいてな」

そういうと、部屋の時計を見る

「そろそろか」

コンコンッ

「白羽、いる？」
「ああ、入れ」

静かに、音もなくドアを開く

「……誰？」

寡黙な、暗い雰囲気の青い制服の少女
そのしゃべり方といい、目が隠れてしまっている前髪といい、確実に見た目で損をしている

「同室の大納　剛とクラスメートの友船　遊子、焔坂　雪美だ」
「オベリスク・ブルー　川口（かわぐち）　奈沙（なずな）。よろしく」
「あ、よろしくお願いします」
「よろしく！！」

「うーん……」

挨拶をする2人
しかし1人唸っている雪美

「ねぇ、もしかして女兄弟、っていうか姉いたりする？」
「姉なら」
「やっぱり！」

『何がなにやら』なダイナと遊子
白羽にはなんのことか分かっているようだが

「私、焔坂　紅衣の妹ね！分かる？」
「分かる」

きゃっきゃと1人騒ぐ雪美と冷たく―（本人にその気はないのだろうがそう見える）対処する奈沙

「『アレ』どうしたの？」
「雪美の兄の紅衣と奈沙の姉の来羅（らいら）が知り合いでな」
「あー、なるほど……」

と、ダイナが納得していると白羽はなにやらごそごそと漁っていた

「そういえば奈沙、これを取りに来たんだろ？」

そう言って白羽が手にしていたのはＤＶＤ　ＢＯＸ

「武藤遊戯が初代決闘王に輝いた大会、別名『決闘都市』編のＤＶＤだ」

「あ、いーなー！！」

敏感に反応したのはダイナ

「……なんだ、見たいのか」

「すっごく」

目を爛々と輝かせている

「……奈沙、４回目だし」

「嫌」

「……」

にらみ合う２人

「4回も見てるなら先譲ったっていいだろ！！」
「順番は順番」

にらみ合う2人
それと奈沙は今回が4回目であり、まだ3回しか見ていない

「（さて、どうするか）」

純粋な少年のような輝きの瞳を無碍にするのは心が痛む
それに同室なので後から愚痴られると辛いものがある
しかし、先に約束していたのは奈沙であり、付き合いも長い

「（ダイナにレディファーストは）」

もちろん期待できない

「あ、ならさ！」

そんな平行線上の争いに切り込んだのは、意外にも雪美だった

「デュエルで決めない？」

「乗った！！」

即答したダイナ

「……乗る」

遅れながらに奈沙も答える

「よし、じゃあデュエルリングに行きましょー！」

――……

……――

「絶対勝つ！！」

「負けない」

制服の色は青と赤な2人

制服の色は基本的に実力に比例する

つまり、ダイナと奈沙では実力が大きくあるということになる

「「デュエル！！」」

とはいえ、当事者であるダイナに気持ちで負けている部分はないようだ

「ドロー！！」

先攻はダイナ

「『仮面竜』召喚！！カードをセットしてターンエンド！！」

△

■

４０００／４

「リクルーター攻撃表示？」

リクルーターというのは破壊荒されて効果を発動するものが多く、『仮面竜』も例外ではないが、わざわざ攻撃表示で出さなくても守備表示で構わない――むしろ戦闘ダメージを受けない守備表示の方が好ましいのだが

「うるせぇ！！」
「ドロー」
「（うっかりしてたなんて言えるかよ）」
単なるプレイングミスのようだ
「『迷える仔羊』発動」
ぽんぽんっ、と毛玉のような仔羊が２体
「生まれた『仔羊トークン』２体をリリースしてモンスターセット」
「最上級モンスターか！！」
『迷える仔羊』を発動したターンには大きな行動制限を受ける
が、セットならその制限をクリアできるのである
「カード１枚セット。ターン終了」
■　■
４０００／３

「ドロー！！なら！！『ドラゴンズサーヴァント』を特殊召喚！！
２体をリリースして、『ダークエンド・ドラゴン』召喚！！」
「最上級モンスター……！」

一瞬、奈沙の顔が引きつる

「『ダークエンド』の効果！！攻撃力，守備力と引き換えに、モンスター１体を墓地へ送る！！」
「効果破壊……」

そういう奈沙は少し悲しそうだった

「正体不明なモンスターはさ、やっぱ怖いからな」

ダークエンド・ドラゴン
ＡＴＫ２６００→ＡＴＫ２１００
ＤＥＦ２１００→ＤＥＦ１６００

「『ダークエンド』、ダイレクトアタック！！」
「リバース、『正統なる血統』」
「蘇生カード！！」
「対象『ビッグ・コアラ』」
「げっ！？攻撃力２７００！？」

天井に届くんじゃないかという程巨大なコアラ
後ろの奈沙が完全に隠れてしまう

「くそっ、カードをセットしてターンエンドだ！！」

△
■
４０００／３

「ドロー。『野生暴走』装備」
「『野生暴走』？」
「『ビッグ・コアラ』、『ダークエンド』を攻撃」

大納ＬＰ４０００→ＬＰ３４００

握りこぶしを上から叩きつける、たったそれだけの筈なのに衝撃が半端ではない

「くっ……まだまだぁ！！」
「『野生暴走』効果、攻撃力分ダメージ」
「げっ！！」

大納ＬＰ３４００→ＬＰ８００

「……風前の灯」

「まだだ！！手札を１枚捨ててリバース発動、『巨龍跋扈』！！」

奈沙ＬＰ４０００→ＬＰ３１００

もがく『ダークエンド・ドラゴン』

偶然か『ビック・コアラ』の足を引っ掛け、そのまま縺れ、倒れこむ

「全滅」

「流石に無策、ってわけじゃないぜ！！」

「カード１枚セット。ターン終了」

■ |

３１００／２

「召喚、しないのか？」

このターン、奈沙は通常召喚を行っていない

戦闘は行えないが壁にはなるのだが

「デメリット。発動ターン、召喚も特殊召喚も行えない」
「なるほど……。ドロー！！『死者蘇生』発動！！蘇れ、『シャインパルス・ドラゴン』！！」
「最上級モンスター……」

『巨龍跋扈』のコストで捨てておいたのだ

「『シャインパルス』でダイレクトアタック！！」

奈沙ＬＰ３１００→ＬＰ３５００

「痛い……」

大納ＬＰ８００→ＬＰ３４００

「『シャインパルス』の効果！！与えたダメージ分だけ回復する！！ターンエ
「リバース、『召集の笛』」
「『召集の笛』？」

ピーッ！と耳に触る甲高い音がなる

「ダメージ以下の攻撃力、『デス・カンガルー』特殊召喚」

奈沙が新たに呼び出したのは両手にグローブをはめ、ボクサーのように鋭いパンチを繰り出しているカンガルー

「ターンエンドだ！！」

△

―

３４００／２

「ドロー。切り札、見せる」

「切り札……！」

その一言に息を呑むダイナ

セットカードもない現状では、防ぐ手段はない

「『黙する死者』、発動。『ビッグ・コアラ』特殊召喚。『融合』を発動」

「融合召喚！？」

「野生の王、『マスター・オブ・ＯＺ』」

「攻撃力４２００！！なんじゃそりゃ！！」

左目に大きな傷を持ったボクサーコアラ
肩にかけたチャンピオンベルトが勇ましい

「『ＯＺ』、『シャインパルス』を攻撃」

大納ＬＰ３４００→ＬＰ１８００

放たれた右ストレート
その衝撃波だけでも雑魚モンスターはひとたまりもないだろう

「な、なんつうパワーだよ……」
「カード１枚セット。ターン終了」

△
■
５００／０

「ドロー！！」
「（『カオスエンド・ドラゴン』辛い）」

大納のライフポイントは１８００
『マスター・オブ・ＯＺ』の攻撃力を１８００にされれば、そのまま『カオスエンド・ドラゴン』の攻撃で奈沙のライフポイントは０

である

「カードをセットしてターンエンドだ！！」

■ |

１８００／２

「（『和睦の使者』……これで相棒が来るまでの時間を稼ぐ！！）」

反撃のカードは引けなかったが、時間稼ぎとなるカードは引けたようだ

「リバース、『砂塵の大竜巻』。セットカードは破壊」

「『和睦の使者』が！？」

「ドロー。『ＯＺ』、ダイレクトアタック！」

大納ＬＰ１８００→ＬＰ０００００

「うごふっ！？」

立体映像では、本当のダメージはない

しかし、衝撃や視覚的には実体験に等しいので、思わず変な声を上げてしまったダイナ

「……勝ち」

表情から読み取れるわけではないが、どうやら勝てた事自体がよほど嬉しかったようだ

「白羽」
「なんだ？」
「ＤＶＤ、ダイナから」
「いいのか？」
「良い」

不思議そうにたずねる白羽
奈沙はダイナの方を見ると

「……弱いから」
「ちょっ、笑うなー！！」

フェイズ４：ＤＶＤ論争（後書き）

ダイナ―兄ちゃん(あん)→神騎
白羽―師匠→神騎
雪美―兄→紅衣
奈沙―姉→来羅

こうやってみると、遊子の人脈せま（ｒｙ

フェイズ５：ＴＶ越しの彼（前書き）

相変わらずサブタイトル微妙だなぁ
あ、おはようございます
※現在８：３５

今回は、前作から読む人にとっては少し懐かしい人が出てきます
それと評価システム未公開にしました
理由は……ラジオ的なコーナーをしたかったから（待て

最後に１つ
決闘シーンのストック切れました

フェイズ５：ＴＶ越しの彼

『さぁ、やって参りました！！プロリーグ……ルーキーランク戦！！』

『『ウォォオォオォォ！！！！』』

『司会はまいどおなじみ浦美枝椛（うらみえもみじ）が行ってまいります！！』

割れんばかりの歓声

会場は超満員だ

『挑戦者！！電脳世界を支配する、注目必須の期待の新人！！』

既に最高潮と思われた会場が、更に熱を帯びる

『Ｍｒ．ＰＳＹＣＨＯ（サイコ）、西郷昇華（しょうか）！！』

入場ゲートから激しい演出と共に現れるのは、プロデュエリストであり元アカデミア生徒――西郷昇華

長髪を揺らしながら、堂々とした足取りで前に出る

しかい、少し表情は渋い

恐らく呼び方のせいだろう

※ＰＳＹＣＨＯ＝精神病患者，精神病の

『対するは！！コンビネーションの達人！！よいこの味方、弘道秀（ひで）！！』

反対に位置する入場ゲートから登場するのは、冴えないが優しげな優男
あまりプロらしくはなく、雰囲気だけならばむしろ昇華の方がプロらしいがプロ暦は１年ほど秀のほうが上だ

「君がうわさの新人君だね？よろしく」
「……よろしくお願いします、先輩」

『両者挨拶も済んだところで参りましょう！！ルーキーランク戦準決勝！！』

司会のその一声に、昇華と秀の間の空気が張り詰める

「「デュエル！！」」
『それではいったんコマーシャルです！！』

・・・・

「「ＣＭかい！？」」

ダイナと雪美のＷツッコミ

ここはオシリス・レッド食堂
今は土曜の昼前、備え付けの大型ＴＶでプロリーグ、ルーキーランク戦の鑑賞会である

ここに居るのは提案者の神騎，誘われたダイナと白羽，おまけの雪美に遊子
と、何故か奈沙

「えっと……奈沙ちゃんだっけ？川口さん家の。誘って……はなかったよね？」

最後に『いや、居て悪いわけじゃないけど』などとフォローを交えつつ恐る恐る尋ねる神騎

「白羽が」
「あ、なるほど」

奈沙の返答はだいぶそっけなかった

「あ、兄（あん）ちゃん！！始まるぜ！！」
「え、もう！？」

「私のターン、ドロー」

先攻は昇華のようだ

「『終末の騎士』を召喚、その効果で『人造人間ーサイコ・ショッカー』を墓地へ」

昇華が召喚したのは、放浪の騎士……といった風貌のモンスター
攻撃力は頼りないが、昇華のデッキのキーカードだ

「カードをセットしターンエンドだ」

△
■
４０００／４

「ドロー！『黒魔導師クラン』ちゃんを召喚！」

男女問わずギャラリーから歓声が上がる

秀が召喚したのは、ウサギ……というよりは『うさぎさん』の帽子をかぶったジト目の少女

キャラクターデザイン自体の評判も高い、いわゆるアイドルカードだ

「カードを2枚セットしてターン終了！」

△

■■

４０００／３

「『人造人間ーサイコ・リターナー』を召喚。『サイコ・リターナー』でダイレクトアタック！」

ひょろひょろの体を動かしエネルギー弾を撃とうとするが

「リバース発動、『アイドル同盟』！」

「！？」

「この効果で！攻撃は無効となって、お互いにデッキから場に存在する攻撃力１３００以下のモンスターと同名モンスターを守備表示で特殊召喚できる！」

「私は『サイコ・リターナー』か」

『終末の騎士』は１４００、僅かだが対象外だ

「そう！そして僕はもう1体の『クラン』ちゃんだ！」

お互いに新たにモンスターを展開する
フィールドがだいぶ賑やかしくなってきた

「ならば、『終末の騎士』で『クラン』を攻撃！」
「リバース発動、『攻撃の無力化』！」
「くっ！」

突撃する『終末の騎士』をフィールドに現れた渦がさえぎる

「だめだよ、そんな乱暴しちゃ」
「ターンエンドだ」

△△□
■
４０００／４

「ドロー！スタンバイフェイズに『クラン』ちゃんの効果発動！」

昇華ＬＰ４０００→ＬＰ３１００→ＬＰ２２００

「君の場のモンスター１体につき３００、今は３体だから９００ダメージ。そして『クラン』ちゃんは２体だから１８００ダメージだ！」

「くっ……！」

二体の『クラン』から鞭打たれる昇華
ライフポイントを半分近く削られる

「『白魔導師ピケル』ちゃん召喚！そしてこの瞬間に『アイドル同盟』の効果発動！」

「なにっ！？」

秀の場に新しく2体のモンスター
今度はひつじさんの帽子だ

「『アイドル同盟』は永続カード、新たに召喚されたモンスターが攻撃力１３００以下なら特殊召喚できる！そして『リトル・スクラム』発動！」

「……くっ、『リトル・スクラム』か」

どうやらこのカードの効果は知っているらしい

「この効果で攻撃力１３００以下の同名モンスターが２体いるモンスターは戦闘では破壊されない」

『リトル・スクラム』の効果で秀のモンスターは破壊されない
それだけではない

「さっき『アイドル同盟』の効果で呼び出した『クラン』ちゃんを攻撃表示に！バトル、３体で『サイコ・リターナー』を攻撃！」

昇華ＬＰ２２００→ＬＰ１６００→ＬＰ１０００→ＬＰ４００

「くっ……」

昇華の『サイコ・リターナー』も効果対象内なので破壊されないのだ
これでは後に繋げられない

「カードを１枚セットしてターン終了」

△△△□
□□■

４０００／１

「ドロー」
「分かってると思うけど、次のターンに君が受けるダメージは３００×３×２の１８００だ。どうする？」

そもそも残りライフポイントは僅か４００
『クラン』の効果でのべ２体分のダメージを受ければそれでゲームエンドだ

「ならば、こうしよう。『融合』発動」
「『融合』だって！？」
「手札の『人造人間ーサイコ・ロード』、場の『サイコ・リターナー』２体を融合！『人造機帝ーサイコ・カイザー』！」

昇華が呼び出したモンスターは、確かに『人造人間』と呼ぶにはふさわしくないモンスター
両肩や背中から飛び出した電極からは雷レベルの電気がほとばしっている

「それが君の切り札のようだね……」
「『サイコ・カイザー』の効果により相手のみ罠カードが封殺される。リバース発動、『リミット・リバース』！『サイコ・リターナー』を呼び戻す！」

「（総ダメージは３１００……まだなんとかなるかな）」
秀のセットカードは『ディストラクション・ジャマー』
モンスター破壊に対するカウンター罠だが、もはや機能しない

「『サイコ・カイザー』の効果発動！手札１枚をコストに、場の魔法，罠カードを全て破壊する！」
「っ！？『リトル・スクラム』まで！」

昇華ＬＰ４００→ＬＰ１００
秀ＬＰ４０００→ＬＰ３１００

「破壊したカード１枚につき、そのコントローラーに３００ダメージだ」

僅かなライフポイントを更に極限まで削った昇華
しかし、これで道は開けた

「でもこれで君の場の『サイコ・リターナー』は破壊され……！」

『サイコ・リターナー』は破壊された――いや、破壊してしまった

「そう、『リミット・リバース』が破壊されたことにより『サイコ・リターナー』は破壊される。蘇れ、『サイコ・ショッカー』！」

しかし昇華の場に『サイコ・ショッカー』は現れない
むしろ他のモンスターすら消えてしまっている

「サレンダーだ、この子達が傷つくのはちょっと見たくないかな」
「ああ、分かった」
『これで最後の決勝進出者が決まりました！！プロ暦半年、なんと最短ルートを通ってきた異才のデュエリスト……西郷昇華！！』

今までで最高潮の歓声一（思わず遊子がＴＶの音量を下げるほど）が昇華を祝福する中、昇華は浮かれた様子もなくリングを後にする

「……カッコイイ」

思わず奈沙からもれた一言
雪美ならまだしも１番予想外の人物から発せられたことに一同唖然である

……いや、ダイナ以外である

「くーっ！！やっぱりプロのステージは違うなー！！」

なにやら興奮が治まっていない様子のダイナ

「そういやお前、シチュエーションに酔うタイプだったな」

どうもダイナは『お膳立てされた舞台』，『ドラマチックなシチュエーション』といったものに弱いらしい

「兄ちゃん、やら「ない！！」

ダイナが言い切る前に断る神騎

「これから用事なの！！」

「えー！！……あ、悠さんとデートでしょー？」

からかうように尋ねるダイナ

神騎は一瞬表情をしかめるが今度は意地の悪そうな笑顔をし

「おう、デートデート。もうラブラブデートだぜ？」

「え、マジ！？」

ため息をつく一同

『からかうほうがからかわれてどうする』、と

「じゃあな！！」

寮を後にする神騎

「……しら

「断る」

「いやまだ何も聞いてないよ！？」

この場に居る全員ならもはや聞かなくても質問は分かる

「眠い」

いつもならまだ寝ている時間に起きているからだろう

既に１／３程度寝ている状態だ

「遊子！！」

「えっ！？私はちょと……」
「雪美！！」
「私兄(にい)と会う約束があるもん」
「奈沙！！」
「……ふっ」
「なんではなでわらうかな！！」

語尾を強めながら奈沙ににじり寄る

「……（弱いから）」
「おま、ボソッと言ったの聞こえたぞ！！」
「聞こえたか」
「やっぱりかー！！」

どうしてわざわざするかは分からないが、存分にダイナを挑発する奈沙

「奈沙君はいるかな？」

話の流れを変えるように、初めて聞く声がする

みなの意識を集めた主は青い制服なのに堂々とレッド寮に入ってきた

「ＤＶＤ。持ってきた」

「ありがとう。……白羽」
「もう寝たみたいです」
「……そう」

どうやら奈沙の客らしい
あの時（前話参照）奈沙が代わり白羽から借りたＤＶＤを持っている

「……なんだ、見知らぬ顔ばかりか」
「「お前（あんた）がだろ！？」」

本日二度目のＷツッコミ
（芸人として）なかなかのコンビネーションだ

「実野快晴（みのかいせい）、オベリスク・ブルー１年だ」
「よろしくお願いします、快晴さん」

お互いに自己紹介も終わる
どうやら、快晴，奈沙，白羽の３人は中等部からの付き合いらしい
そもそもシステム上、１年のこの時期はよほどのことがない限り中等部からのくりあげ以外でオベリスク・ブルーにはなれないから当

たり前なのだが

「なぁなぁ、快晴！！デュエルしようぜ！！」

『まだ治まってなかったのね』などといった女性陣の会話など聞いてないらしく、目を輝かせているダイナ

「構わないけど……面倒だ、デュエルシートでやろう」

デュエルシート……プレイマットとなども呼んだりする品物である
デュエルディスクを用いない簡易決闘である

「持ってきたぜ、2枚」
「よし、なら始めよう」

「「デュエル！！」」

お互いのデッキをシャフル、セットする

「先手は貰うけど問題は？」
「モチロンなし！！」
「あっそ。ドロー」

「いや『あっそ』って……お前が質問してきたのに……」

軽くへこむダイナ

「『ブラックコスモ』発動」

フィールドカードを発動する

「うぉ！？なんか気持ち悪っ！！」

カードに描かれたイラストは、濃淡が微妙に異なる黒で塗りつぶされていた

「問題ないみたいだね。モンスターとカードをセットしてターン終わり」

■　■

４０００／３

「ドロー！！『ツインヘッド・ドラゴン』妥協召喚！！」

ツインヘッド・ドラゴン
ＡＴＫ２２００→ＡＴＫ１１００

「更に『ドラゴンズ・エボリューション』発動！！『ツインヘッド』は『ブラックブラッド・ドラゴン』に進化！！攻撃だ！！」
「リバース発動、『和睦の使者』。問題ないよね？」

当然のようにセットカードをめくる
快晴が発動したのは、簡単に言うと戦闘による被害を０にする罠カードだ

「くそっ！！何もない！！」

しかし、戦闘による被害はなくなるが戦闘自体は無効にされていないのでバトル続行である

「セットモンスターは『Ｕ．Ｎ．アルバトラン』。何もないみたいだしリバース効果で６００ダメージ」
「げっ！？」

軽い悲鳴と共に電卓からダメージ分の値を引く
大納ＬＰ４０００→ＬＰ３４００

「……まぁ結局リバースするし、良しとしとくか。カードを1枚セットしてターンエンド！！」

△
■
３４００／２

「エンドフェイズに『ブラックコスモ』の効果発動。守備モンスターは全部裏に戻る」
「じゃあ、また『アルバトラン』の効果が……」
「そう、発動する」

先ほどの戦闘が本当に無駄――むしろ裏目に出てしまったようだ

「ドロー、『アルバトラン』をリバース。問題ないよね？」

大納ＬＰ３４００→ＬＰ２８００

電卓を叩き、ふと快晴のカードを見る
『Ｕ．Ｎ．アルバトラン』、自らの種族を消す効果とイラストから全体がつかめない―（『ブラックコスモ』と大差ない）ところから見ると『アンノウン』シリーズのようだ

「でもこれで『アルバトラン』は表側攻撃ひょ……守備表示！？」
「『ブラックコスモ』の効果。『Ｕ．Ｎ．』モンスターが裏から表になる場合、守備表示に出来る。モンスターをセットしてターン終了。問題ないなら君のターンだ」

■■

―
４０００／３

「くそっ、やり辛い！！」
「相手のペースを乱すのも戦術さ」

快晴の言うことは尤もだろう

「ドロー！！『ドラゴンズサーヴァント』を召喚！！『ブラックブラッド』で『アルバトラン』に攻撃！！」

戦闘で表側表示にされたことにより『アルバトラン』効果が再び発動される

大納ＬＰ２８００→ＬＰ２２００

「問題ないみたいだし『アルバトラン』のダメージを受けてね」
「『ドラゴンズサーヴァント』でセットモンスターに攻撃！！」
「セットモンスターは『Ｕ．Ｎ．キルキア』。守備力は２４００」
「何だって！？」

大納ＬＰ２２００→ＬＰ１２００

「高すぎだろ……」

「デメリット持ちだから問題なし」

デメリットなしの下級モンスターの最大守備力は２２００
確かにデメリットがなければこのステータスはありえない

「ターン終わるの？」
「まだだ！！リバース発動、『表裏一体』！！闇の『ブラックブラッド』が光の『シャインパルス・ドラゴン』に変化する！！『キルキア』に攻撃だ！！」

淡々と処理を行う快晴

「なるほど、『ドラゴンズサーヴァント』と『ブラックブラッド』

で壁を破壊して『シャインパルス』で回復する算段だったのか。問題は『ドラゴンズサーヴァント』の攻撃力の低さだな、むしろダメージを受けている」
「う、煩い！！エンドだ！！」

自らの戦略を―（しかも失敗している）を淡々と解説される
流石に恥ずかしい

△△
―
１２００／１

「ドロー。『超科学培養』発動。『アルバトラン』を墓地からセット」
「またあいつか！？」

これでダイナは６００ダメージ暫定

「『アルバトラン』をリリース、モンスターをセット」
「上級モンスターのセット……怪しいな」
「なに、すぐ分かる。『超科学変移』発動。セットしていた『Ｕ・Ｎ・オーウェン』をリバースし、『シャインパルス』を裏側守備表示に変更」
「ああ！？」

ダイナは特攻デッキ
守備はおろそかであり、それはモンスターにも反映されている
『シャインパルス』の守備力では下級モンスターにすら競り負ける

「『オーウェン』で『シャインパルス』を攻撃。カードをセットしてターン終了」

△
■
４０００／０

「ドロー！！……くっ、モンスターとカードをセットしてエンドだ！！」

■■
■
１２００／０

「あれ、『ドラゴンズサーヴァント』が裏に？」
「『ブラックコスモ』の効果だ。何か問題あったかな？」
「あ、そうか。フィールドだから俺も受けるのか」

とはいえ、リバース効果モンスターでもなんでもないので影響はない

「ドロー。『オーウェン』で『ドラゴンズサーヴァント』に攻撃。問題は？」
「ああ、ないぜ」
「モンスターをセットしてターン終了」

△■
■
４０００／０

「ドロー！！リバース発動、『不死の竜』！！『ドラゴンズサーヴァント』を呼び戻す！！」

召喚権を残し、２体のリリースがそろった

「セットしておいた『仮面竜』と共にリリース！！『光と闇の竜』召喚！！」
「効果無効の最上級ドラゴンか。問題ないね」
「『光と闇の竜』で『オーウェン』に攻撃！！」
「それは問題ある。リバース発動、『月の書』。『光と闇の竜』が対象だ」
「無効！！」

光と闇の竜
ＡＴＫ２８００→ＡＴＫ２３００
ＤＥＦ２３００→ＤＥＦ１８００

「しかし、これで攻撃力は『オーウェン』を下回った」

大納ＬＰ１２００→ＬＰ１１００

「いいや、問題ないね！！『光と闇の竜』が破壊されたことにより、墓地の『シャインパルス』が復活する！！『シャインパルス』で『オーウェン』に攻撃！！」

実野ＬＰ４０００→ＬＰ３８００
大納ＬＰ１１００→ＬＰ１３００

「ターンエンドだ！！」

△
｜
１３００／０

「この展開は問題ないな。ドロー」

「そうか？切り札はもう倒したぜ！！」

自信満々に言うダイナ

「切り札だけがデュエルじゃないと言う訳だ。『Ｕ．Ｎ．エイリアス』をリバース、４００ダメージだ」

大納ＬＰ１３００→ＬＰ９００

「ぐっ……」

「更に『超科学培養』発動。『アルバトラン』をセット。ターン終了だけど問題はないよね？」

「くっ……」

■■

―

３８００／０

「ドロー！！」

『Ｕ．Ｎ．アルバトラン』はリバース効果で６００ダメージを持ち、

『Ｕ．Ｎ．エイリアス』は４００ダメージを持つ

合わせれば１０００

つまり、２体ともリバースしてしまえば大納のＬＰは０となる

「……エンドだ」

△

―

９００／１

「ドロー。２体をリバース。問題は？」

「ねぇよちくしょー！！」

大納ＬＰ９００→ＬＰ３００→ＬＰ０００

部屋の隅でうずくまるダイナ

元のテンションが高かったために、落差が激しい

「奈沙、あれはなんだ？」

快晴の素朴な疑問に、１度軽く鼻で笑ってから奈沙は答えた

「……弱虫」

「うるせぇ！！」

フェイズ５：ＴＶ越しの彼（後書き）

だいたいこれで新レギュラーキャラは揃った感じです

フェイズ6：Ｄａｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｗａｒｋｒａｌｌｙ（前書き）

ひっっさし振りですこんにちは

英語は苦手ですが、タイトルはスペルミスではないです

さて、早速ですが業務連絡を

・多分、次回更新は来月になります
学校的な意味や、私的な意味で

・今回の話はターニングポイントです

・実はこの話、１度間違えて削除しました
なので、急いで書き直したので若干雑です

・感想，評価を公開に設定しなおしました
非公開にしていたのは気の迷いです

んー……この位かなぁ
何か急ぎの用がありましたら、サイト（Ｔｈｅ　Ｄｕｅｌ　Ｌｉｂｌａｒｙ）にありますメルボより

フェイズ6：Day of the warkrally

「ありました！！『ゆの5番』！！」
「なんて書いてあるのかなー？」

アカデミアの森の中に響く声

「えっと……『我々が普段使用しているのは何進法でしょうか？』」
「えっとー……」
「十進法です」
「そーなのかー」

今現在、全1年生と一部2，3年生によるウォークラリーの開催中なのだ

ダイナは遊子、それに3年生の水瀬晶（みなせあきら）
先ほどから聞こえる気の抜けた声は晶のものである

「あと15個だねー」

だいたい1／3といったところである
まだ時間は昼前、一日中使うので十分なペースである

「よいしょっと」

木の上から器用に降りてくるダイナ
このように木の上だったり、落とし穴の中だったりと問題の隠し場所には手間がかかっている

「次はどれですか？」
「んー……『つの３３番』かなー」
「「３３番！？」」

すべての文字に等しく問題数はあるので、５０音×３３番＝１６５０問となる
全問探すわけではないのだが、設置してあることには変わりない

「主催側、がんばりましたね……」

ちなみに主催側は教師や悠，それに神騎達といった各寮の代表生徒である

「……！」
「ん、どうした？」

何かに気づいたような反応を示す遊子

「あ、いえ。なんでも」

「ふーん」

なにやら釈然としてない様子のダイナだが、深く追求するのはやめたようだ

「あのー、水瀬先輩」

「んー？」

遊子に呼ばれ歩みを止める晶

「あの、その、えーっと……」

「？」

なにやらら恥ずかしそうにもじもじとする遊子

「ト、トイレはどこですか！」

「あー、戻らないとないかなー。あっちにまっすぐだねー」

広い森を使うため、各所に簡易トイレを設置してある
その場所は各グループの代表が持っている地図に書かれている

「すみません、行ってきます！」
「はい、いってらー」

駆け出す遊子に手を振る晶

「トイレの何が恥ずかしいのか？」
「そこに触れないのが男の優しさだよー？」

晶の言った言葉にも？で返すダイナであった

変わってこちらは遊子視点

ただいま絶賛疾走中

そして、既にトイレの場所は通り過ぎている

「（急がないと……アレは強大すぎます！）」

何かをめがけ、一心不乱に走る遊子
その歩みが止まった時、彼女の目の前にはすれたオシリス・レッドの制服を着た男がいた

「……あん？なんだてめぇ？迷子か？」

木にもたれ掛って寝ていたようで、遊子の気配を察すると気だるそうに起きだす

「……貴方のソレは、何ですか？」

遊子の言葉に男の表情が一転する

「へぇ、見えてんのか」
「はい」
「見　え　て　ん　の　に　来　た　の　か」
「っ！？」

急に男の方から、高圧なプレッシャーが遊子を襲う

「はい、だから来ました。貴方のその闇の力、消させてもらいます！」

デュエルディスクを構える遊子

「おもしれぇ！ザコがどこまであがけるか見てやるよ！」

男もデュエルディスクを構える

「デュエルフィールド、『捕縛牢』発動！」
「はぁ？」

まだデュエルは始まっていないにも関わらず、フィールド魔法をセットする遊子

「『捕縛牢』の効果で、敗者はその力を失います。……例えそれが強大な闇の力でも」
「け、てめぇの弱っちい力と俺様の闇じゃ賭けになんねぇな」

場を、静寂が包む

「行くぜ？」
「行きます！」
「「デュエル！」」

その瞬間、２人の周りを光の檻が包んだ

「俺様のターン、ドロー！」

先攻は男

「モンスターとカードをセットしてターンエンドだ！」

■　■
■
４０００／４

「私のターンです！ドロー！」

後攻は遊子
その表情は普段の彼女とは別人に見えるほど真剣な表情をしている

「手札のモンスターをコストに『ワン・フォー・ワン』を発動します！デッキから☆1の『チューニング・サポーター』を特殊召喚します！」

遊子が特殊召喚したのは、中華鍋を頭にかぶったようなモンスター

「ザコモンスター……リリースか？」

「違います。チューナーモンスター、『ロード・シンクロン』を召喚。場にチューナーが存在するため墓地の『ボルト・ヘッジホッグ』を特殊召喚します！」

「（3体で合計☆7か）」

「3体でチューニング！シンクロ召喚、『ロード・ウォリアー』！」

「☆8シンクロだと！？」

遊子の場には、乳白色の高位なる戦士（ロード・ウォーリアー）

「『チューニング・サポーター』をシンクロ素材にする場合、☆2として扱うことが出来ます。そして『ロード・ウォリアー』の効果発動！」

背中の大剣のようなものを前に振りかざす

「1ターンに1度、デッキから☆2以下の戦士か機械モンスターを特殊召喚出来ます。『ボルト・ヘッジホッグ』を特殊召喚！」
「ちっ、高速展開か」
「行きます！『ロード・ウォリアー』の攻撃、ライトニング・クロー！」
「だけど甘い！『獄炎の悪魔』をリリースし『疑心暗鬼』発動！」

男のモンスターへと向かっていた『ロード・ウォリアー』は身を翻し、その爪は『ボルト・ヘッジホッグ』を切り裂く

「『疑心暗鬼』の効果でてめぇのモンスターは同士討ちだ」
「守備表示でよかった……『チューニング・サポーター』の効果で1枚ドローしてターンエンドです」

△
―
４０００／４

手札の枚数はお互いに4枚
後攻であることを含めても攻撃力３０００を誇る『ロード・ウォリアー』をコントロールしている遊子が有利である

「ドロー！」

そのはずであるのに、男はにやにやと嫌らしい笑みを浮かべている

「てめぇがロードなら……『導きの悪魔（デモン・ロード）』召喚！こいつは俺の場にモンスターが存在しなければ、リリースなしで召喚出来る！」

「ろ、ロード！？」「更にこいつのもう1つの効果で手札の『玩具の悪魔』を特殊召喚！」

マントを纏った骨身の悪魔

マントを翻すと、その中から小柄な道化師が現れる

「『玩具の悪魔』の効果！自身をチューナーとして扱わなくする代わりに場のモンスター1体の☆を2つ引き上げる！」

導きの悪魔

☆5→☆7

「シンクロ召喚しないのになんで☆操作を……？」

「シンクロならするさ」

「え？」

『導きの悪魔』はチューナーではない

そして『玩具の悪魔』は、わざわざチューナーという特性を捨てている

とてもシンクロ召喚出来る状況ではないはずだ

「……このカードでなぁ！『Ｄａｒｋ　Ｔｕｎｅ』発動！手札の『Ｄａｒｋ　Ｓｉｄｅ』をコストに『導きの悪魔』はダークチューナーとなる！」

「だ、ダークチューナー！？」

「狂気の闇が世界を包む！狂い、舞い踊れ！レベル－６、『狂気の悪魔（ティック）』！バトルだ、攻撃！」

「えっ、え！？」

『狂気の悪魔』はＡＴＫ２０００

『ロード・ウォリアー』には１０００も及ばない

「インサニティ・アイ！」

真紅の瞳が『ロード・ウォリアー』を捕らえる

「狂気の瞳が狂わせる！ライトニング・クロー！」

「きゃっ！」

遊子ＬＰ４０００→ＬＰ１０００

「私の『ロード・ウォリアー』が私を攻撃した……？」
「『狂気の悪魔』が攻撃する場合、変わりに相手モンスターが攻撃するのさ！そして『Ｄａｒｋ　Ｔｕｎｅ』の効果で『ＤＳ－ダーティ・チャージ』を発動！エンドだ！」

△
－
４０００／１

「私のターンです。ドロー」
「この瞬間、『ダーティ・チャージ』の効果発動！お互いに手札を全て捨て、俺様が捨てた枚数だけドローする！」
「そ、そんな！？」

遊子の手札はドローカードを含め５枚
それがたった１枚になってしまったのだ

「そして『狂気の悪魔』の効果だが、こいつは１ターンに１度戦闘で破壊されず、戦闘したモンスターを破壊し８００ダメージを与える」
「ええ！？強すぎます！」
「これが闇の代償だ……さぁ、引きな！」
「うぅっ……ドロー！」

・ドローカード
再調律

「（これなら……）『再調律』を発動！墓地の『ロード・シンクロン』を除外して、同じ☆の『デブリ・ドラゴン』を特殊召喚します！」
「お、新しいチューナーか」
「墓地から『ボルト・ヘッジホッグ』を、『ロード・ウォリアー』の効果でデッキから『チューニング・サポーター』を特殊召喚します！」
「また☆8か……しつけぇな」
「貴方が闇の力なら、私は光でそれを払います！シンクロ召喚、『スターダスト・ドラゴン』！」

遊子の場に舞い降りた白銀の竜
特殊な力を持つであろう男だから気づいたのであろう
――この竜が精霊であることに

「行きます！『スターダスト・ドラゴン』で『狂気の悪魔』に攻撃、シューティング・ソニック！」

男ＬＰ４０００→ＬＰ３５００

「無駄だ！精霊だろうとこの効果からは逃れられない！『狂気の悪

魔』の効果発動！」
「『スターダスト・ドラゴン』、効果発動！」
「何！？」

銀の粉になって空に消える『スターダスト・ドラゴン』

「破壊する効果を無効にして、破壊します！」

霞み、無に帰した『狂気の悪魔』

「ちぃ……厄介な！」
「ライトニング・クロー！」

男ＬＰ３５００→ＬＰ５００

「もう１体いるのを忘れてもらっては困ります」
「くっ、このザコがぁ！！」
「ターンエンドです。この時、『スターダスト・ドラゴン』はフィールドに舞い戻ります」

△△
―
１０００／１

「ドロー……いいぜ、ザコが何体並ぼうと無限の前ではゼロだ」
「どういう意味ですか？」

遊子のモンスターをザコ呼ばわりする男
対破壊効果と毎ターンの高速展開
どう考えても強力な布陣である

「『Ｃｕｎｎｉｎｇ　Ｒｅｇｅｎｅｒａｔｉｏｎ』発動！墓地のダークシンクロを除外し、墓地の闇属性モンスターをダークチューナー扱いで特殊召喚する！」
「そ、そんな……」
「☆８の『理想郷の悪魔』を特殊召喚。『堕天の誘い』を発動し『玩具の悪魔』を特殊召喚、『理想郷の悪魔』の☆を引き上げる！」

理想郷の悪魔
☆８→☆１０

「☆１０ですって！？」「無限の闇が世界を包む！無限の果てに終わりを見ろ！レベル－９、『無限の悪魔』！」
「こ、攻撃力３５００……」

『ロード・ウォリアー』すら凌駕する攻撃力

「（まずいです……）」
「『無限の悪魔』の効果。それは墓地に置かれた瞬間、舞い戻る」
「……え？」

カードは使用されたり、破壊されると墓地へ送られる
それは戦闘でも、カードの効果でも同じ

「そ、そんなのどうしようもないじゃないですか！」
「……そうか、どうしようもないか。なら終われ」
「え？……キャー！？」

「遊子襲いなぁー……」
「迷子かなー？」

トイレにしては少し長い時間
ダイナと晶は動くに動けず退屈しているようだった

「すみませーん！」
「遅い！！」

去っていった時と同じように必死に駆けてくる遊子

「どこで道草食ってたんだよ！！」
「すみません、途中で何個か問題見つけまして……」
「お、マジで！！」

態度が一瞬で変わるダイナ
単純である

「『さの２２番』と、『もの６０番』です……って、あれ？」

恐らく、見つけた当初は急いで戻ることに必死で気づかなかったのだろう
落ち着いた今、遊子は気づく
同時にダイナと晶もだ

「「「何番まであるの！？」」」

※５０音×６０番＝３０００問

フェイズ7：舞い降りた翼（前書き）

前回（9月）に来月更新と書きました
……うん、嘘は言ってない

と、いうわけでこんばんは
サイトシステム変わってからは初めまして

今回から、毎度お馴染み@クォリティーな超展開が始まるよ！
……うん、なんでだろう
最初シナリオ考えた時はそうは思わなかったんだけどね

あれか、文才のせいか

さて、業務連絡……というか感想を一言
新サイトシステム

使いづれぇ！！↑

フェイズ7：舞い降りた翼

「さてさておはようございます！浦美枝文（うらみえあや）です！」

マイク片手に朝早くからやけにハイテンションなのはラー・イエロー3年、知る人ぞ知る新聞少女、浦美枝文

「今日は！この学園で『ＴＨＥ☆謎』と呼ぶべき立場、研究生！冴神流転さんに突撃インタビューです！」
「よろしく！文ちゃん！」
「よろしくです！」

とある一室に集まった3人
1人は元気いっぱい少女、頭にちょこんと乗った烏帽子がトレードマーク
アカデミアニュース代表にして唯一の製作者、浦美枝文
立ち上がらんかの様に前のめりな状態で椅子に座っている
向かい合う様に座っているのは、紹介にもあったようにフェイズ1でも登場した、冴神流転
そして1人立たされているのは、別にアカデミアニュース製作者でもなんでもないのに文と知り合いということだけでカメラ係に任命された辺見太一

「朝からテンションたけぇよ……」

ただいまの時刻、7時ジャストである

「それでは最初の質問です！研究生の皆さんは、普段何をしてらっしゃるんですか？」

マイク代わりにペンを向ける
録音は、テーブルの上におかれた小型のレコーダーが行っている

「普段かー」

思いっきり背もたれに寄りかかる流転
気楽なのはいいが、態度が悪い

「別に事務員と対して変わんないぜ？見回りとか、図書館整理とか掃除とか」
「……本当に事務員と同じですね」
「俺達の立場は、『施設をタダで使えて、寝食用意されてる代わりに学園の手伝いをしろ』っていう感じかな」
「へー、そうなんですか」

これには文も以外だったらしく、純粋に感嘆の声を上げる

「普通は卒業したら去年で言う昇華ちゃんみたいにプロ目指したり、技術分野にいって周辺機器いじったり、カードデザイナーなったり、販売分野に行ったり……ってみんな何かしら線路を持ってんのさ」
「ほうほう……」
「そういう文ちゃんも、将来の道は大概決まってんじゃない？」
「私はですね！報道関連や実況なんていう、こう……熱い現場に居たいんですよ！」

熱を込めて語る文
本気だということがよく分かる

「えーっと……」
「太一。辺見太一」
「略してへんたいか」
「略すな！」
「太一ちゃんは？」
「俺は……」

言葉に詰まる太一

「……特に」
「んじゃ、研究生だな。なんたって将来の決まってない奴らの溜り場だからな」

「おいおい」

笑って言う流転だが、自分のことである
笑い事ではない

「ではでは！次の質問です！――……

……――これで終わりです！ありがとうございました！」

お昼が少し過ぎた程度、どうやら終わったようだ

「（疲れたー）」

終始立ちっぱなしの太一
今は空腹よりも座りたい

「では最後に！」
「（まだあんのかよ……）」

腰につけたケースからデッキを取り出す

「せっかくです！デュエルしましょう！」
「お、おもしれぇ！」

乗り気の流転

「俺のヒ

「……どうかしましたか？」

急に固まった流転

「いや、悪い！急用思い出したわ！」

取り出そうとしていたデッキケースをしまい、慌てて飛び出す

「また今度なー！」

遠ざかる流転の声

「……」

唖然とする文

「で、どうするんだ？それ」

取り出したデッキを指差し問う

「……仕方ありません！太一。やりましょう！」

「へーへー」

しぶしぶといった感じに返事する太一

本心は満更でもないのだが

文達と別れ、単身森の中へ

「ちぇっ、せっかく可愛い女の子と楽しくデュエルやれそうだったのになー」

愚痴を回りに聞かせるように言いながらどんどん進み、開けた場所で止まる

「出て来いよ！もうバレてんだぜ？」

すっと静かに、音もなく流転の目の前に白いローブに身を包んだ男が現れる

「ちぇっ、男か」
「貴様、何者だ」

流転の言葉は無視し、問いかける

「名前を聞くときは、まず自b「刹那だ。日向刹那」
「……冴神流転だ。よろしく、刹那ちゃん」
「貴様、何者だ」
「は？もう名乗ったぞ？」

全く、それこそ一字一句平淡なイントネーションすら変えずに問いかけてくる刹那

「何者だ」
「この学園の研究生、これで満足か？」
「この学園の研究生は精霊持ちが条件なのか？」

「！！」

とっさに刹那との距離を開く

「お前こそ何者だ」
「我らは銀の翼。精霊に縛られし者を開放する光の使者だ」
「『開放』ねー。無理強いはしてほしくないんだけど？」

周囲に意識を張り巡らせる
『我ら』ということは組織、つまり複数人だ

「安心しろ。この場所には幹部3人しか来てはいない」
「……さいですか」

むしろ、もう3人も侵入を許してしまっていることが問題だ

「私の精霊の力で、貴様を精霊の呪縛から開放してやろう」
「……なんだ、お前も精霊付きなんじゃん」

突如右手を掲げる刹那
その腕には、デュエルディスク

「（左利きか）」
「デュエルフィールド、『捕縛牢』発動！」
フィールド魔法ゾーンにカードをセットする
「敗者はその力を勝者に委ねることとなる」
「ようは負けなきゃいいんだろ！」
デュエルディスクを構える2人
「「デュエル！」」
2人を光の檻が包む
「俺のターンドロー！」
先攻は流転
「（まずは様子見だな）『E・HEROスパークマン』を召喚！カードを1枚セットしてターンエンドだ！」

■　△
４０００／４

青のボディーに黄色い装甲を装備した、雷のヒーロー
攻撃力は１６００とほどほどである

「ドロー。『ソーラー・エクスチェンジ』を発動。手札の『ライトロード』モンスターをコストに２枚ドロー」
「よーするに手札交換ね」
「その後、デッキからカードを２枚墓地へ送る」
「自分からデッキ破壊だって！？」

デッキ枚数が０になればライフポイントに関わらず敗北したしまう
それをわざわざ加速しようと言うのだ

「『ライトロードパラディン　ジェイン』を召喚」

白を貴重としたカラーリングの、騎士

「『スパークマン』を攻撃」

ライトロードパラディン　ジェイン
ＡＴＫ１８００→ＡＴＫ２１００

「『ジェイン』はモンスターに攻撃する場合、攻撃力が３００ポイントアップする」

流転ＬＰ４０００→ＬＰ３５００

空に大きく『Ｈ』の文字が現れる

「リバース発動、『ヒーローシグナル』！この効果でデッキから『エアーマン』を特殊召喚だ！」
「……ちっ」
「『エアーマン』の効果で『ネクロダークマン』を手札に加えるぜ」
「ターンエンドだ。エンドフェイズに『ジェイン』の効果でデッキからカードを2枚墓地へ送る」
「またデッキ破壊……」

これで４枚
加速したドローの枚数を含めれば、残りターン数を６ターンも削ったことになる

「『ライトロードビースト　ウォルフ』がデッキから墓地に送られたので特殊召喚させてもらう」

突如刹那の場に現れる、雄雄しい獣人

「っ！？それは予想外だぜ」

△△

｜

４０００／５

「ドロー！まずは『戦士の生還』で『スパークマン』を回収、『融合』発動！」

「……ちっ」

『融合』による多彩な戦略、どうやら刹那はヒーローに対する知識はあったようだ

「『スパークマン』と『ネクロダークマン』を融合！『ダークブライトマン』！」

「……なんだ、攻撃力２０００か」

現れたモンスターの攻撃力に一安心

『ライトロードビースト　ウォルフ』の方が攻撃力は高い

「へ、言ってな。『ダークブライトマン』で『ジェイン』を攻撃！」

刹那ＬＰ４０００→ＬＰ３８００

「ダメージ受けたんだしもうちょいリアクション欲しいかな」
「１０００を下回らなければ問題は無い」
「？」

いまいち刹那の言っている意味が分からない

「まぁいいや。攻撃した『ダークブライトマン』は守備表示になる。『エアーマン』を守備表示に変更しターンエンドだ」

□□

―
３５００／３

「ドロー。『ウォルフ』をリリース、『ライトロードエンジェルケルビム』を召喚。効果発動」
「今度は何だ……？」

手にした杓杖を天に掲げる

「デッキからカードを４枚墓地送り、カード２枚を破壊する。『エアーマン』と『ダークブライトマン』を破壊だ」

空から白雷が降り注ぎ、流転のモンスターを破壊する

「かかったな！『ダークブライトマン』の効果発動！破壊されたとき、モンスター１体を破壊する。『ケルビム』も道連れだ！」

「……その程度、分かっていた」

「だったら何だよ」

刹那はもう通常召喚を行っている

なのにこの余裕、何かある

「『裁きの龍』特殊召喚！」

「な、何だと！？」

突如現れる銀毛のドラゴン

儀式や融合、シンクロなどの手順を踏まずにいきなり攻撃力３０００の大型モンスターが立ちはだかる

「このモンスターは自分の墓地に『ライトロード』モンスターが４

種以上存在する場合に特殊召喚される」
「攻撃力３０００……まずいな、こりゃ」
「ダイレクトアタック！ギルティレイ！」

銀の咆哮
なんとか耐えた流転だが、周囲の様子はその威力を現すように吹き飛ばされている

流転ＬＰ３５００→ＬＰ５００

「カードをセットしターンエンド。デッキから４枚カードを墓地へ送る」

△
■
３８００／３

「ドロー！へへ、そっちが切り札見せてくれた事だし、こっちも行きますか！『融合』発動！」
「……ちっ」

２度目の『融合』
このタイミングでと言う事は、逆転の一手か

「『フェザーマン』，『バーストレディ』を融合し『フレイム・ウイングマン』を融合召喚！」
「『摩天楼』か……」

『摩天楼ーースカイスクレイパー』があればその効果で『フレイム・ウイングマン』の攻撃力は３１００まで跳ね上がり、その効果を含めフィニッシャーとなりうるだろう
だが

「（セットカードは『サイクロン』、無駄だな）」
「ちっちっちっ。『融合回収』発動！」
「……ちっ」

刹那の心を読んだかのような発言をする流転
『融合回収』、その真意は刹那にも分かる

「『スパークマン』と『融合』を手札に戻す！そして『融合』発動！『フレイム・ウイングマン』，『スパークマン』を融合！『シャイニング・フレア・ウイングマン』！」

輝く光のＨＥＲＯ
その輝きは、流転の勝利を現すかのようだ
Ｅ・ＨＥＲシャイニング・フレア・ウイングマン

ＡＴＫ２５００→ＡＴＫ４６００

「その攻撃力は墓地の『Ｅ・ＨＥＲＯ』の枚数に応じてアップする！シャイニング・シュート！」

光の弾となって『裁きの龍』に突撃する

刹那ＬＰ３８００→ＬＰ２２００

「そしてモンスター効果！破壊したモンスターの攻撃力分のダメージだ！」

「……くっ！」

デュエルディスクを思いっきり地面に叩き付ける

「なっ！？」

その衝撃で故障してしまったようで、立体映像は消えてしまう

そのままそのディスクを広い、森の奥へと逃げ込む刹那

「ちょ、待てよ！」

流転の呼び声虚しく、刹那の姿は消えてしまった

「銀の翼、か」

「刹那さん、大丈夫でしたか？」
「申し訳ありません、マスター」

森の中のテント
そこに集まる４人組み
１人は先ほどまで流転とデュエルしていた刹那だ
『マスター』と呼ばれる少女に跪いている

「（マスターの呼び名も、この扱いも嫌なんだけどなー）」

どうやら『マスター』はこの扱いを望んでないらしい

「デッキは無事でしたか？」
「はい、この通り」
「そうですか。怪我もなくてよかったです」

ほっと一息

「では、明後日の件は大丈夫ですね」
「勿論」
「では、当初の予定通りで」

手を胸に当て、目を瞑る

「銀の翼が、この学園を救えるようにがんばりましょう」

テントから解散した４人組み
刹那は留守番のようだ

「……はぁ」

大きく溜息１つ

「（力だ……もっと強い力があれば……！）」

そのとき刹那に渦巻く『何か』に、周囲はおろか刹那本人も気づいてはいなかった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3670h/

遊戯王デュエルモンスターズSINGLE FAITH

2010年10月9日21時09分発行